

芥川だより

発行日***2017年5月1日 e-mail:akutagawa_dayori@yahoo.co.jp
最新号から創刊号まで閲覧できます。 http://akutagawadayori.sakura.ne.jp/

編集発行人 下村嘉明

発行所

☆ 着物から服へ

着物から服を仕立てます

高槻市芥川町2 -1 4 -3

TEL072 -681 -8870



***** 一部100円です *****

あっ、しまった！



とっさにけつまずいてバタッとこけた。その瞬間、「あんた、調子に乗っているから…慢心ね」と家内に言われたような気がした。すぐに立ち上がれない、ゆっくり息をして両手をつき何とか立った。両肘が土にまみれて血が出ているからペットボトルの水で洗いタオルでまいた。膝も打って痛い、タイツの上から見るがさほど血は出ていないようだ。まあ、こんなもんだらうと一人合点しながら山道を下る。

2時間ばかり歩いて電車に乗り家に帰ってよく見たら膝の下がえぐられたように切れている。こりゃあかんと思ひ近くの外科医院へ頼み込んで行く、先生も学生時代に冬の六甲山で滑って膝をやって今も具合が悪いと言いながら「少し、黒ずんだところは切りますよ」「ええ、好きなようにやってください」「ベストを尽くしましょう」と老練なる医師は自信ありげにゆっくり縫っていく。そばで見ていた看護師が「よかったね、院長先生がいて」運がよかったみたいだ。たまたま切れた箇所も骨と骨の間で神経や血管が少なく痛みや出血が少なかったのだから。不思議にも、かなり縫ったのだが痛みがなく骨にも異常がないので歩くのには支障がない。

山歩きの危険性は十分承知していたのだが、いつも通り慣れてくると油断する。身体の調子も良くなってくると、まだまだやれそうだと欲が出てくる。危険な個所では気をつけるから事故は起こりにくい、平坦でなんでもないとこで事故は起きる。集中せずによからぬことを考えているから、見ていて見えていないのである。やっぱり山は歩くに限る、走るとこじゃないと思ひ込ませるようにしたが走るあの爽快感は捨てがたいとまた欲が出る。

病気にしてもケガにして自分を振り返るには有難いものである。だれに言われるより効き目がある。ああしなかったら、こうしておればとタラレバを繰り返すのだ。そうして臆病風と怠惰が心を覆ってくるから厄介だ。私は知らぬ顔でそれらを薬と思ひ飲み込んでしまうことにした。

死をめぐるあれやこれ (32)

石川 吾郎

御所とポジティブ・フィードバック

私はしばしば京都御所を自転車に乗って横切る。御所は砂利が敷いてあり極めて走りにくい。だが自転車の轆(わだち)が作った細い「けもの道」が出来ていて、ここを走れば快適でスピードも出る。

実はこの「けもの道」、工学というポジティブ・フィードバックでできあがる。道を自転車が走ると砂利をはじき飛ばして走りやすくなる。走りやすい所を次の自転車は走ろうとする。すると益々道は走りやすくなる。これの繰り返して、けもの道はより太く走りやすくなり、多くの自転車が走るようになる、というわけ。このメカニズムは爆発的に急加速することが多い。

これと逆なのがネガティブ・フィードバック。これはシステムを安定に保とうとするもので家電などの多くに応用されている。破綻を嫌う賢人は須くネガティブ・フィードバックを旨とするものだ。

ところで安倍政権は共謀罪などで、加速的にわが国を右旋回させている。これは明らかにポジティブ・フィードバックだ。つまり爆発的な破綻に向けて突き進んでいる。このような政治にブレーキを掛けるのがマスコミ・ジャーナリズムの役割だが、政権はすでにマスコミを籠絡していて、ブレーキはかからない。この国はいつか来た爆発的な破綻に向かっていると見える。

* * *

なお御所の自転車けもの道は、時々新しい砂利が撒かれ完全に消去される。だがわが国にはそのような仕組みは備わっていない。

ポジティブ・フィードバックの制御をもつ国は破局に向かう。破局は戦争・原爆・敗戦・占領という経過を、また取るのだろうか・・・。

巻頭エッセイ	下村嘉明	1
巻頭コラム	石川吾郎	1
みんなが知ろう日本の危機21	伊藤明	2
素老人☆よもだ帳 38	坂本一光	6
陰謀論を哲学する	祖蔵哲	8
大峰奥駈道 9	梵店主	10
おつちよこチョイぼけ 49	A O	11
大人の今昔物語 33	石川吾郎	12
B級サラリーマン渡世譚 46	明石幸次郎	14
オクラの山たより 8	困丁生	15
我が奥の細道 5	成瀬和之	19
米国紀行 5	河原林成行	19
三条大橋と「野ざらし」	大江雅鬼	22
孫ワオツチング 17	福田圭	23
編集後記	嘉	23
女90年の軌跡	眞糍	24
俳句	土田裕	24
	影山武司	24

みんなで知ろう日本の危機 (21)

安倍さんて、ファシズムなん？の巻

伊藤 明

はじめに

森友学園の問題は何一つ解決しないまま、安倍政権は頼被りをして、逃げようとしています。本来ならば、政権が倒れなければいけないほどの大きな疑獄事件であるはずですが、北朝鮮の危機をおおりに立てて、マスコミもそれに乗る形で、国民の記憶から森友学園問題とそれに続

く加計学園問題などの重大な構造的腐敗の疑惑を消し去ろうとしているかのようです。ただ四月下旬になり籠池氏から、財務省田村国有財産審理室長と籠池前理事長らとの面談の音声ファイルが公開されて、この土地取引を「特例」と表現するなど、新しい事実が明らかにされてきています。国会でさらに徹底的な究明をして、ぜひとも安倍政権を退陣に追い込むことが必要です。

今回は共謀罪と、米国で話題になっているという「ファシズムの特徴」ということを取りあげます。

■共謀罪で生活いつなるのん？

共謀罪の国会審議が始まってしまいました。現在の国会の勢力図からすると、このままでは昨年の安保法制と同様に強行採決に持ち込まれてしまうことになることが危惧されています。共謀罪は「テロ等準備罪」と名付けられています。その内実、テロとは関係がほとんどないこと、また公式には「一般人が対象になることはない」と安倍政権は説明していますが、一般人かそうでないかは捜査側が判断をする以上、誰もが対象になり捜査・検挙される、ということを国民はしっかりと認識しておく必要があります。

さらにこの法案では、従来の日本の刑法の大原則である「既遂犯処罰の原則」、つまり罪に問われるのは、行った行為に對してただだ、という原則をくつがえすもので、一般人が考えて語り合うだけでも、犯罪にされてしまう、内心の自由を犯す可能性をもたらすものです。

具体的には、捜査機関が特定のSNSのグループやそのなかのメンバーに疑いをかけたら、メンバー全員のリストを作成し、関係性を把握し、必要に応じて取調べができるようになります。このような捜査活動は、一般の市民を日常生活の場で監視・萎縮させるものであり、プライバシーを犯し自由に生きる権利を侵害するものです。この立法は、表現の自由・報道の自由をこの国から奪い、国民に対する弾圧を許して、戦争前の密告と検閲の暗黒社会へと日本を作り替えてしまうものといえるでしょう。

さらに閣僚たちの暴言など、聞くに堪えない腐敗ぶりが露呈されています。毎日新聞の岸井氏は「失言、不祥事は安倍一強の驕りや弛みからだと思うが、一連の不祥事の中には、森友学園問題もあるし、共謀罪の強行審議もみんな入る。通常だったらこれは、『政権の末期症状』。選挙があれば政権交代の最大の焦点になってもおかしくないような状況なのに、全く状況が逆」と述べています。

このような政権の腐敗ぶりが明らかにされても、政権への支持率が下がらないのには、果たして支持率の統計が操作されたイカサマではないのか、という疑念が湧いてきます。国民はそれほど愚かな存在ではないでしょう。我々は、マスコミのこのような、統計をそのまま信用してはいけなと、つくづく思います。

■共謀罪のある日常

雑誌『世界』が「共謀罪のある日常」と題して、共謀罪によって私たちの日常

にどんな変化が起るか、二つの事例を挙げていますので、それを紹介しましょう。

①大学のサークルでチラシを作成しようとして、雑誌に載っていた写真やイラストを使おうと計画をしただけで、共謀罪が適用される！

◆政府案では、著作権侵害も対象犯罪となっており、中止した場合にも処罰の対象となる可能性があります。

②もしも基地建設反対の座り込みに行くために、航空券の手配・購入をしたら、共謀罪によって逮捕されてしまう可能性があります。

◆実際に行動を起こした本人はもちろん、ネットワークを使ってそれに賛同したとみなされた人も、処罰される可能性があります。

③電車の中で、他人が痴漢と間違われた場面に遭遇した人。目撃したそのままを法廷で話そうとしただけに、偽証罪の共謀を疑われて、逮捕される可能性もあります。

◆捜査機関が考える(つくりあげる)「事実」を話さない場合には、偽証罪の共謀で罪に問われる可能性があります。

こんなふうに、共謀罪「テロ等準備罪」は、私たちの日常生活に、大きく影響をしてくることが必至です。これによって私たちは言いたいことが言えなくなり、密告におびえ、声を潜めるような萎縮した生活を強いられる、つまり言論の自由が奪われてしまうのです。

雑誌『世界』はさらに、「共謀罪」の主な論点・問題点として次のようなものを

挙げられています。

●複数人で犯罪を行う「組織的犯罪集団」が対象

●犯罪の合意によって共謀があったとされる

●合意にはSNSの「既読」や目くばせも含む可能性がある

●現場の下見や資金の調達などの準備行為が処罰の要件

●実行に着手しなくても刑事罰の対象になる可能性

●共謀の捜査・立証のために、警察による家宅捜査や盗聴・密告の奨励などが、横行するおそれがある

●共謀罪を新設すべき根拠（立法事実）は乏しい

ここで、対象となる「組織的犯罪集団」というのは、捜査側がそのように判断をすれば、どんなものでも「組織的犯罪集団」と決めつけられてしまう、ということに注目する必要があります。SNSの

「既読」や目くばせが、すべて犯罪とされるわけではないでしょうが、捜査機関がある人物に目をつけ、罪に問おうとしたとき、このような些細なことで逮捕できてしまう可能性があるのです。国会で

政府側は「一般人は対象にならない」と繰り返ししますが、一般人かどうかは捜査側が判断するわけなので、その範囲はき

わめて曖昧。嫌疑をかけられた瞬間に一般人ではなくなるわけで、いつ「組織的

犯罪集団」とみなされるか分からない、

というのが現実なのです。これはまさに

「暗黒社会」の始まりと言えるでしょう。

また、最後の項目の「共謀罪を新設す

べき根拠が乏しい」のに、なぜ安倍政権はやるうとしているのかという点では、「テロ」を口実にして、また国際条約締結のためと言い続けていますが、この目的は国民から言論の自由を奪い、政権への批判に圧力をかけて、その萎縮を狙う意図があります。

こうしてこの通常国会で共謀罪法が成立すれば、**安倍政権による治安立法の三法が完成**されようとしています。つまり**①秘密保護法**、**②安保法制**、**③共謀罪法**です。

そして次に待っているのは、安倍政権が最大の目的としている「**憲法改悪**」つまり国民から人権を奪い、わが国を戦争へと駆りたてる明治憲法なみの憲法へと「**日本国憲法**」を作り替える作業でしょう。

共謀罪は改憲へのステップなのです。表現の自由を押さえ込み、その上で憲法九条をはじめとして、憲法を「自民党改憲案」の方向へと作りかえる階段を上がっていくことを彼らは企てています。

この動きに対抗するためには、国会の外から、反対運動を盛り上げて行くことがぜひ必要になります。安保法制時以上の運動の盛り上がり、国民の思いの受け皿作りをぜひ作っていききたいものです。

■**安倍さんをファシズム診断してみたら？**

米国には、ナチス・ドイツによるユダヤ人大量虐殺の悲惨さを伝えるために作られた「アメリカ合衆国ホロコースト記念博物館」というものがあります。そこに展示されているファシズムの特徴を示したリストが、今アメリカで話題になっているという事です。

これはむろん、米国のトランプ政権の特徴がそれに近いことを、米国民が感じ取っているからなのだと想像されます。しかしアメリカ以上にこれに当てはまっている国があると思われまますので、これを紹介してみましよう。

「**ファシズムの特徴**」

そのリストを書いたのは政治学者ローレンス・プリット氏という人物です。この人はヒトラー（ドイツ）、ムッソリーニ（イタリア）、フランコ（スペイン）、スハルト（インドネシア）、ピノチエト（チリ）のファシスト制度を研究して、これらの政権に十四の共通点を見出しました。彼はこれらをファシズムの特徴を特定するものと呼んでいます。後の世代のために自由・民主・平和主義を否定したファシズムが、初期にどのような兆候を示していたのかを記述したものだ、ということなのです。

これを見て、私が最初に頭に浮かんだのは医学でいう「**診断基準**」つまり、ある病気だと診断を下すための「**診断基準**」に他ならない、ということなのです。医学の分野では、精神疾患のようにまだ病気の原因がわかっていない病気を診断するために、その病気の症状や状態をリストアップして、項目がいくつあてはまっていれば、その病気だと診断を下すという「**診断基準**」というものがありますが、このリストはちようどそのようなもの、と考えられるのです。

彼が示したファシズムの特徴は次のとおりです。

- ① 強力で継続的なナショナリズム
- ② 人権の軽視

- ③ 団結の目的のため敵国を設定
- ④ 軍事優先（軍隊の優越性）
- ⑤ はびこる女性蔑視
- ⑥ マスメディアのコントロール
- ⑦ 安全保障強化への異常な執着
- ⑧ 宗教と政治の一体化
- ⑨ 保護される企業への力
- ⑩ 抑圧される労働者
- ⑪ 知性や芸術の軽視
- ⑫ 刑罰強化への執着
- ⑬ 身びいきの蔓延や腐敗（汚職）
- ⑭ 詐欺的な選挙

と、十四個並んでいます。これをざっと見てみると、何のことはない、安倍政権のままを表現していることに気づきます。そこで、現在の日本の安倍政権がこれらの項目にどれほど当てはまっているか検討していくことにしましょう。

当てはまる項目が多ければ多いほど、「**ファシズム政権**」と診断できるようになる、というわけです。

- ① 強力で継続的なナショナリズム
- ・ 過去の歴史を修正し正しくみようとしない。第二次世界大戦で日本の犯した侵略行為から、目をそらして否認し続ける態度を一貫して持ち続け、歴史を書き換えている。

・ 道徳教育をはじめとして、国民に過剰でゆがんだ「愛国教育」を押しつける。

② 人権の軽視

・ 原発事故の収束はまだ遠いのに、支援を打ちきろうとしている。

・ 格差を拡大させ、貧困問題にまともにとりくまない。生存権を脅かす。子供の貧困は六分の一。一人親の子供の半数が

貧困。OECD加盟国で最低です。

- ・ 非正規労働の制度導入で、過酷な労働環境を導入。若者など労働者を貧困に陥れ、生存権を脅かしています。非正規労働者が二千万人を超す中、非正規の七割が年収二百万円に届かないことが明かにされています。

- ・ 自民党の改憲草案では、明治憲法なみに人権を制限しようとする。

- ・ 特定秘密保護法で、知る権利を制限する。
- ・ 共謀罪で、言論の自由に対して弾圧を加えようとしている。

- ・ 教育費をつり上げ、国民の教育を受ける権利を奪う（とくに高等教育）などなど、数え上げたら切りがありません。

③ 団結の目的のため敵国を設定

- ・ これはまさに北朝鮮の危機を煽っていることそのままです。つい最近、安倍首相は言うに事欠いて「北朝鮮はサリンを搭載したミサイルを持っている可能性がある」と、他ならぬ国会で国民を脅かしているのです。これによって、自分不正行為への国民の追及の目をそらして、軍事への依存を正当化しているのです。これを政府の「御用」新聞たちが、大々的にあおり立てています。

④ 軍事優先（軍隊の優越性）

- ・ 危機を煽りながら自衛隊の米軍との共同訓練を増大させています。米軍の代わりに自衛隊を戦争にかり出すことを目的にしていると思われれます。

- ・ 自衛隊の海外派兵拡大、軍事予算を増額、武器輸出など、次々に増大をさせています。軍需産業中心に産業構造を再編しようとしています。

- ・ 大学の研究費を削り、他方で防衛省所管の軍事目的の研究予算を大幅に増やして、大学研究を軍事中心に再編させつつあるのです。

⑤ はびこる女性蔑視

- ・ 安倍政権では「女性の活躍」を叫んでいます。これは女性を人間として尊重するといった意味ではなく、あくまで女性をより多く労働市場に参加させ、経済成長を実現しようとするものです。安倍政権の背景をなす思想的な傾向は、三世代の大家族の中で、役割を担うものとしての、旧い日本的な価値観になった女性像です。それは「産む存在」「経済成長を担う存在」という役割を与えられたものと考えられているといつてよいでしょう。

- ・ 財源がないとして、子供の貧困・母子家庭の貧困の問題をほとんど放置している段階で、「女性活躍」というのは女性の利用であり蔑視であるといえるものでしょう。

⑥ マスメディアのコントロール

- ・ 放送停止の脅し、NHK会長人事を实质支配しています。マスコミ首脳と会食を重ねて、政権に批判的なコメントをしないように、圧力を掛けています。

- ・ 批判的なキャスターやコメンテーターを降ろすように圧力をかけて、政府に批判的なコメントをするキャスターが次々に番組を降板していったことは、記憶に新しいところです。

- ・ 読売・産経はすでに、政府の広報紙といったポジションになっていることは有名ですが、NHKのニュースでも、巧妙に国民を政権に有利に誘導するような報道がなされていることが、明らかです。

例えば、国会で政府が追及される場面では、必ず安倍首相が菅官房長官の弁解的なコメントを長々流す、といった具合です。（NHKの問題については、この記事の終わりの部分を参照してください）

⑦ 安全保障強化への異常な執着

- ・ 米国への隷属。このほどの米国大統領の交代は、米国からの隷属に対して一定の距離を置く絶好のチャンスでしたが、安倍氏は世界に先駆けて、トランプ大統領に犬がしっぽを振るように、忠誠を誓ったのでした。また今般の北朝鮮情勢の緊迫化にあたっては、米軍の武力的な圧迫の方針を支持して、国際的な緊張の高今の時期に、米国と合同軍事訓練をして、いたずらに北朝鮮を刺激する暴挙に出ています。これにより万が一、米朝の戦闘が開始されたとなれば、韓国とともに、わが国は一番の標的にされることになる可能性がグンと上がったと思われるのです。安倍氏は「徹底的にわが国民を守る」という主旨のことを国会で語りましたが、政府が作った、北朝鮮ミサイルが到達したときの対処法といえは、「自己責任で建物や地下に逃げてネ」といったたぐいのものです。

⑧ 宗教と政治の一体化

- ・ これはまさに国家神道を政治の中心にしようとしたくらむ「日本会議」との深い関係そのものです。神社本庁など極右勢力が政治への圧力を強めています。さらに現役閣僚を始めとする与党議員たちが、国際的な非難にもかかわらず、繰り返して靖国神社を参拝し続けています。

・ 安倍政権が企てている「自民党改憲草案」は、まさにこの「祭政一致」を目指していると言えます。

- ⑨ 保護される企業のみ
- ・ 安倍政権の行う経済政策は、まさに大企業優先のものです。安倍氏は、大企業が儲かればひいては下々まで潤うとしたトリクルダウンの理屈を唱えていたが、これは結局起こらず、国民の格差と貧困が拡大しただけでした。

- ・ 法人税値下げと、消費税の値上げ、それに「輸出戻し税」（消費税を値上げすると、輸出企業は消費税分だけの補助をされるというあまり知られていない企業保護制度。これは消費税が上がれば増額されるので、経団連などは常に消費税増税を主張する）によって、大企業が大幅に利益を挙げているのが現状です。

- ・ 最近あるサイトが衝撃的な事実を報じていました。それは「富裕層上位四十人の資産は十五兆九千億円あまりで、日本の全世帯の五二・五％の資産と同じになった」というものです。これはまさにアベノミクスは超富裕層だけの資産倍増計画だったということになるのです。

⑩ 抑圧される労働者

- ・ これは労働条件の劣悪な、非正規労働の拡大が、如実に実態を表しています。「正社員は利権だ」とは、派遣労働をわが国に導入する方向を作った竹中平蔵氏が語ったということです。この人物は同時に派遣大手パソナの会長でもあるのです。日本の労働者の多くを、労働条件の悪い非正規の労働者に陥れ、それによって利益を得ている、とみられます。さらに外国人労働者の導入で、安い賃金で国

民は彼らと競争させられることになりま
す(底辺への競争)。

⑪知性や芸術の軽視

・「学芸員はガン」だという山本地方創生
相の暴言が問題になりましたが、この発
言が、ビジネスになりにくい学芸を冷遇
する安倍政権の姿勢を端的に表しています。
・ビジネスを優先して学芸を冷遇する姿
勢は、大阪維新の政治姿勢に典型的に見
られますが、これは安倍政権に共通した
ことです。

文化・教育への政治の圧力を強めている
のです。

⑫刑罰強化への執着

・これはまさに、今回取りあげた「テロ
等準備罪」・「共謀罪」が当たります。そ
してその先には、国民の基本的人権を否
定し去ろうとする動きがあり、最終的に
は「自民党改憲草案」を実現させ、わが
国に明治憲法下の社会を再現させようと
しています。共謀罪が成立してしまつと、
この流れは加速していつてしまします。

⑬身びいきの蔓延や腐敗(汚職)

・これはまさに森友学園の問題で、安倍
昭恵夫人の関与がますますはつきりして
きました。マスコミに圧力をかけて国会
での追及をかわしてしまつています。

さらにこれに続いて、加計学園問題など
「国家戦略特区」の制度を悪用して、関
係の深い人脈や団体を優遇する、その構
図が明らかになってきています。これら
はまだ国会での本格的な追及は始まつて
いません。安倍政権は、追及逃れに国会
での審議にさえ圧力を掛けているのです。
⑭詐欺的な選挙

・これもいくつもの段階で「詐欺的」な
やり方が取られています。まず不公平な
小選挙区制。つまり二五%の得票だけで、
国会の過半数以上の議席を占めてしま
うというしくみが基礎としてあります。

・与党自民党には選挙公約を簡単に破る
姿勢も見られます。最近ではPPPは絶
対反対という公約で選挙をしていながら
成立の見込みがなくなつてしまつてもT
PPを国会で通過させるという暴挙を行
つています。

・さらに加えて、選挙の集票の機械化で、
重大な疑惑があるのではないかと言われ
ています。これは「ムサシ」という機械が導
入されて、集票作業がブラックボックス化
されているのです。以前は人の手によつて
開票をされて集計をされてきました。疑義
がだされたときには、それをあとで検証す
ることができたのですが、この「ムサシ」
を導入した選挙区では、候補人ごとに実際
の票が集められないまま、後で検証する
ことができないでブラックボックスの状態
になつているといいます。

・また投票用紙は特殊な材料のものにな
つており、それに鉛筆で書くので(機械
によつて)書き換えられる可能性もある
という指摘まであるのです。書き換えを
防止するためには、投票所に用意され置
いてある鉛筆ではなく(ボールペンでは
書けない用紙なので)、**油性のマジックの
ようなフエルトペン**を持つていつて投票に
使う、というのがいいということ。す。

・なおこの「ムサシ」の機械の会社の大
株主は安倍首相なのだ、ということも言
われているのです。

■ストライク!「ファシズムと診断!」

こうして項目ごとに見てくると、この
十四の項目の全項目に、安倍政権が真ん
中のストライクとして、当てはまつてい
ます。つまり、この「診断基準」に照ら
せば、現在の日本の安倍政権は、すでに
「ファシズム」であると診断できる可能性
が極めて高い、ということになります。
医学的な「診断基準」の場合でも、この
ように全項目に当てはまる場合は大変珍
しいものです。いくつかの項目には当て
はまらない場合が大部分なのです。

しかもこの「基準」は、はじめに紹介
したように、けつして安倍政権に向けて
作られたものではないことに注意してく
ださい。**歴史的に世界のファシズム国家の
特徴をまとめた基準**なのです。現在の日
本の社会がすでに、これほどまでみごと
にこの基準に当てはまる社会になつてし
まつていることは、改めて驚きです。

私たちは、「徐々にゆで上げられるカエル」
のような状況に置かれていると言えるの
ではないでしょうか。わが国はいつの間
にかファシズムの国になつてしまつてい
るのに、国民はそれに気づいていな
い……。

今後、現在の国会で、共謀罪「テロ等
準備罪」が通るようなことがあれば、先
日、衆院法務委員会で参考人として漫画
家の小林よしのり氏が述べたように「言
論が萎縮してしま」つて、わが国のファ
シズム化はいよいよ突き進み、その先に
彼らがたくらむ「改憲」により、完了し
てしまうことになつてしまうのです。

■最近のNHKはどうなってるん?

最後に、ぜひお知らせしておきたいニ
ュースを一つ。このほどNHKの内部の
賞で「会長賞」というものを、NHKの
政治記者・岩田明子記者が受賞したと伝
えられました。この岩田明子という人物
は、NHKニュースなどに「解説」と称
して出てくる安倍首相のお気に入りとし
て有名な記者です。政治解説といいな
がら、安倍政権に有利なことしか言わず、
批判的なことはほとんど語りません。こ
んなことから「安倍応援団」とも呼ばれ
ています。NHKニュースをそのまま信用し
てしまつた大多数の国民を操る役割をして
いる、と言えます。

NHKの中にも、健全な意味でのジャ
ーナリストとして考えをもつて権力に批
判的な報道をめざす人々はいると思いま
す(いると信じたいのです)が、この岩
田記者の受賞は、NHKの首脳陣が「岩
田記者を見習え」「政権批判をせず、政権
を支持するように国民の世論を誘導する
ようなニュースを報道せよ」と彼らに示し
たメッセージであり、さらに言えば「N
HKは戦前の大本営発表を繰り返すぞ」と
宣言したのと同じなのだ、といえるでし
よう。

このように、この賞は、明らかにNHK
内部の記者や現場の制作者たちに、大き
な圧力を与えるものだと考えられます。

おわりに

安倍政権の問題は、個々の特定の問題
に対する姿勢だけが問題というわけでは
なく、多方面にわたつて、多角的に、総合

的に、この国と国民をないがしろにして、国土とそこに住む国民を損ない続けている、ということが問題なのだと思います。そして今回見たように、**安倍政権はもはや「ファシズム政権」と診断できるのです。**

フクシマを語るあるブログは、次のように語っています。「結局、(今般暴言を立て続けに吐いて更迭された復興相) 今村氏をクビにしても何も変わらない。政府が設けた二十ミリシーベルト(年)という根拠のない基準、それ以外は一切補償されない。ちなみにチェルノブイリの避難基準は五ミリシーベルト(年)である。政府は誰が考えても危険である場所を安全というなら、自分たちが実際に住んでみたらいい。できるわけがないだろ。安全に住める場所を奪って置いて放置する、それどころか、危険な場所に帰れと言う。これはまさに迫害ではないか。否、拷問と言っても過言ではない。」

この方は「**日本は国民迫害国家**」だと、表現していますが、これは安倍政権について、正しい指摘なのだと感じます。

◆いま日本社会は、戦後最大の危機を迎えていると思われまます。

これは安倍氏が煽る、北朝鮮からのミサイル攻撃の危機ゆえ、というわけではなく、安倍政権が突き進む、**ファシズムの暗黒社会が再びもたらされる危機**なのです。その大きなステップである「共謀罪」の成立を是非とも阻止するために、我々市民はそれぞれの場から、声を挙げていきましょう。

◆兵士諸君、獣たちに従うな
彼らは諸君を軽蔑し奴隷にし—
思考と感情を統制する

表題の次第はこうである。一九三八年、

トメニアの独裁者アデノイド・ヒンケル総統は隣国オーストリッチに軍事侵攻しこれを併合した。新しい世界の我らが皇帝として紹介され演壇に立ったヒンケル総統は、歓喜する大勢の兵士たち、大群衆を前にしてこう呼びかけを始める。(注1)

『申し訳ないが、私は皇帝になりたくない。支配も服従も嫌だ。むしろ皆を助けた。ユダヤ人も黒人も白人も、人類は助け合いを望んでいる。支え合って幸福に生きたい。憎み合いは嫌だ』

居並ぶ参謀たちは、今日の総統は何やら変だといぶかしげな風を見せ始める。しかしチャーリーは演説を止めない。チャーリー：壇上の男は、実は、第一次世界大戦で負傷し記憶喪失になったユダヤ人の理髪師チャーリーであった。彼はヒンケル総統にそっくりな男で、ヒンケルに間違えられたまま壇上に立っていたのである。演説は続く。

『地球には皆の場所があり、大地は恵みに満ちている。自由に生きられるのに道を失った。強欲が人々の魂を毒し、憎しみの壁を築かせ殺りくへ向かわせた。速度は増したが孤独になった。機械は貧困をもたらした。知識は人を懐疑的にし、知恵は非情

にした。頭ばかりで心を失った。機械よりも人情が—知恵よりも思いやりが必要だ。それがなければ暴力だけが残る。

飛行機とラジオは我々を近づけた。全世界に兄弟愛を呼びかけ、人類をひとつに結びつける。私の声は今も世界に届いている。何百万の絶望した人々に、無実の罪で逮捕され拷問される人々に。彼らに言う、絶望してはならない。人類の進歩を恐れる者の敵意と強欲が—我々の上を通過している。だが憎悪は消え独裁者は死に絶える。人民から奪った権力は人民に戻る。人間に死があるかぎり自由は滅びない。

兵士諸君、獣たちに従うな。彼らは諸君を軽蔑し奴隷にし—思考と感情を統制する。家畜のように扱い大砲の餌食にする。彼らは人間ではない。機械の頭と心を持つ機械人だ。諸君は機械や家畜ではない、人間なのだ。心に愛を抱いている。愛を知らない者だけが憎み合う。

兵士諸君、自由のために戦おう。「神の王国は人の中にある」という(注2)。それは君たちの中にあるのだ。君たちには力がある、機械を作り幸福を生む力が。人生を自由で美しく、すばらしい冒険にする力が。民主主義の名の下に、その力を使おう。新世界のために戦おう。

人々に労働の機会を与え、若者に未来を、老人には保障を。獣たちも同じ約束をした。だが彼らは決して約束を守らない。独裁者たちは民衆を奴隷にする。約束を実現するために戦おう。世界の解放のために、障壁を取り除き—強欲と不寛容を取り除くために。理性の世界をつくるため、科学と進

歩が幸福をもたらす世界を。

兵士諸君、民主主義の名の下に団結しよう(兵士たちと大群衆の、止まない、割れるような拍手とどよめき)

あの時、ヒンケルをはじめとするファシストたちが世界を再分割しようとして大戦を始めた時、それに抗して、世界の指導者を自任する政治家たちは、この理髪師チャーリーを越える、どんな言葉をそれぞれの国民に、また世界に向かって語ったのであろうか。それとも、今と変わらず、「平和は力によってもたらされる」(ペンス米副大統領)と考えたのであろうか。時あたかも、朝鮮半島をめぐる緊迫した動きが急を告げ、来る日も来る日もそれを煽るような報道を見ながら、そんな思いが胸をよぎった。今この時に、安倍首相は、「軍事力の行使を含むすべての選択肢がテーブルの上にあることを言葉と行動で示すトランプ氏の姿勢を高く評価する」、と言った。また、日本海に向かって北上する米空母打撃群と海上自衛隊の共同訓練の実施に関連して、「引き続き米国と緊密に連携し、高度な警戒監視体制を維持し、そしてわが国として毅然として対応していく」、とも述べた。まるで開戦前夜か。『：武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する』と謳った憲法第九条を持つ国の首相とは到底思えない。九条の精神は、決してこの国の外交の基本方針ではないのだ。Xデーはいつか、そのときあなたはこうするかと言わんばかりの扇動的放送を流し続けたテレビでは、とりわけ当初のことであるが、

軍事衝突を避けるあらゆる外交努力をせよ、との理性的な声はほとんど聞かれぬか、かき消されていた。半島に火の手が上がれば、半島だけでなく日本を含む周辺に、世界にどのような事態が起きるかなど他人事、知ったことか、でいいのだろうか。最悪の場合、世界はこんなことで終わってしまうのか、暗澹たる思いであった。

俳優の菅原文太氏は、亡くなる直前、国がなすべきことは国民を飢えさせないこと、そして決して戦争をしないことだと、沖縄県知事選挙で翁長現知事を応援する演説をした。その古武士然とした姿は、往年の名作、NHK大河ドラマ『獅子の時代』（一九八〇年、山田太一脚本）で彼が演じた会津藩士平沼銑次の姿を彷彿させた。

真実は単純なのだと思う。安全保障をめぐる世界の情勢が厳しく変化したから、戦争をしても平和を守る、国民を守るなどと言うのは嘘である。安全保障を言うなら、九条外交に徹し、まずは近隣諸国と仲良くし、いかなることがあっても戦争しない関係をこそ築かなければならない。あの国が悪い、この国が悪いと非難し合い、良いのは同盟国だけだと言うのは、自ら招いた失政から国民の目をそらすためと言うほかない。アベ氏然り、トランプ氏然りである。この国の春の闇は、森友問題にとどまらず、広く深い。

それにしても、「平和は力によってのみ初めて達成される」と言い放ったとき、世界最強の軍事力を持つ国の副大統領の脳裏を、自らの抑止力も彼の北の小国の軍事的冒険主義の暴走を抑止するには無力で

あったという思いがcaすめることはなかったであろうか。もつとも、抑止力などというのはいかに過ぎず、あくまで軍事力は軍事的攻撃力であり、敵を破壊殲滅する力であると確信する者たちには、何を言っても戯言にしか映らないのかもしれない。それでも東アジアの平和を構想するとき、日本が堅持すべきは九条の精神であり、それによってのみこの地域の平和に、したがって世界の平和に日本は貢献することができるだろう。

◆自分を探す旅に出よう

さて、素老人中学校長に、やつと入学式の話をする時が来た。聞いてほしい。

『新入生の皆さん、入学おめでとう。』

私たちの中学校は、今日、一五九名の新しい仲間を迎えることができました。私たちの学校の二年生、三年生の在校生と教職員一同は、皆さんの入学を心から歓迎します。

新入生の皆さんは、去る三月、春の予感が膨らみ始めた頃に、小学校を卒業しました。そして、桜の花も咲き、自然が大きくなり躍動する四月の今日、中学生になりました。いま皆さんは、これから始まる三年間の新しい中学校生活に向けて、記念すべき出発点に立っています。

誰もが、大きな期待をもっているでしょう。不安も少しあるかもしれませんが、でも心配は要りません。まだ何も知らない未知の世界に入り、新しいことを始めるときには、誰でも、希望に燃えながら、その一方で不安にもなるのです。大人だって、それは同じです。毎日、新しい世界を、少しずつ

つ知って行くことで、不安はすぐに消えてしまします。

さて、中学校での生活は、皆さんにとつて、自分を探す旅の出発点になります。自分は何者であるか、そして自分が将来あるべき姿を発見するために、旅に出るのです。この旅の途中で、きつと皆さんは、私たちの学校のあちらこちらに隠されている宝物をみつめるでしょう。また、その宝物は、まだ自分でも気づいていないでしょうが、皆さん自身の中にもきつとあるはずですよ。

皆さんが見つけた宝物は、他の人のそれと比較して、よいとか悪いとか言うものではないかもしれません。それは、皆さん一人ひとりにとつて、かけがえのないものであるということですよ。

もちろん、自分は何をどうすべきか、ということについて、深く心を悩ますことがあるかもしれませんが、むしろ、そのことが重要なのだと思います。でも、忘れないでください。皆さんは、自分を探す旅に、決して、一人で行くものではありません。学校には、大勢の仲間がいます。新しい友達との出会いもあるでしょう。私たち教職員も皆さんを精一杯、心から応援しています。それから、自分を探す旅で、もう一つ大事なことがあります。それは、人間は誰一人として、たった一人では生きてこなかったということです。少し難しいかもしれませんが、聞いてください。皆さんが、家族や仲間の中で、多くの人たちと深く結ばれてきたように、私たちの誰一人として、文字どおりの意味で、たった一人ぼっちで生きていく人はいないのです。人間は、一人

では生きていけないように進化してきた動物なのです。だから、自分を知るためには、私たちは、人間はどう生きてきたかを知らなければなりません。

さて、人間はどう生きてきたかを知るためには、

(1) 人間が生きてきた自然はどうなっているか

(2) 人間はどんな社会をつくり、どんな歴史を積み重ねてきたか

(3) 人間はどんな文化をつくり、文明を築いてきたか

などについて、よく学ばなければなりません。皆さんが中学校で学ぶ教科の内容は、いま話してきたように、人間はどう生きてきたかを知り、人間が生きてきた世界についての基本的な見取り図を作るためのものです。人間が生きてきた世界を理解するには、この見取り図を自分で作らなければなりません。

人間がどう生きてきたかを知ること、人間が生きてきた世界の発見であると同時に、その世界に生きる自分自身を発見することでもあります。自分はこの世界のどこにいるか、この世界の未来にどう生きるか、と問うてほしいのです。私たちは、お互いに、世界を発見し、人間と人間が生きてきた世界への信頼を高める努力をしようではありませんか。

新入生の皆さん。

皆さんが、これから始まる自分を探す旅の中で、どんな宝物を見つけてくれるか。

私はそれを、大きな楽しみにして待っています。

最後になりましたが、保護者の皆さまには、本日は、まことにおめでとうございませう。学校教育は、言うまでもなく、こどもたちが楽しく、安心して、よく学び、大きく成長することを支援するためにあります。学校の主人公は、何よりも、こどもたちです。私たち教職員は、教育ということも私たちの共同事業に、なお一層の力を尽くす覚悟でございます。

もとより、私たちの教育は、保護者の皆さま、学校を支えていただく地域各界の皆さま、関係教育機関などの共同事業でもあります。暖かいご支援ご協力をいただきますとともに、至らぬところには率直なご意見、ご批判をいただきまして、私たちの学校の充実発展に努める所存です。ご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。最後に、いま一度、新入生の皆さん、入学おめでとう」

(かたちは心であり、心はかたちになる■大分の素老人)

(注1) 映画『チャップリンの独裁者』(一九〇四年)のラストの演説。日本語字幕は松岡葉子氏による。ただし、演説文中の改行や句読点は素老人が適当につけた。

(注2) 『新約聖書』(ルカによる福音書)七章二十一節の言葉。



哲学屋のつぶやき (34) 陰謀論を哲学する

祖蔵 哲

世間からみれば得体の知れない哲学というものを生業にしていた時代から一旦身を引き、最近幅広く他分野の専門の先生方との交流も増えてきている。所謂、学問の世界での異業種間交流である。文科系の人々との交流は現役時代も度々あったが、自然科学系との交流は少なかった。最近、その理系の人との座談会があったので参加したが、そこで展開されていた話しに大変驚いたので、そこから話しを切り出そう。

テーマは哲学的なものであったので気楽に参加した。その人は原子物理学者であったが、その日のテーマがなぜか「ソクラテスは何故死ななければならなかったのか」であった。このテーマについては哲学的には論議が尽くされていて一応の定説もある。しかし、科学者が解釈する内容が如何に思っているうちに話しが思わぬ方向へ進んだ。彼曰く、ソクラテスは大義のために死んだ、その大義とは国家のために、と。それから続いて、ある本を取り出して、太平洋戦争も日本が望んで始めたのではなく、謀略にかかった、そしてそれを敢えて引き受けた。それは世界の大義実現の為だと言ったのであった。この本にはその証拠が見つかったということを書いてあると述べ出した。仰天であった。事実に対して最も冷静であろうと思っていた科学者がこのような感覚的な主張を

すると。

近頃、現行の歴史観に対抗したり反感を持ち異なる歴史観の正当性を主張する人々が増加している。日本では現政権が、戦後レジュームの見直しということを政治テーマとしているのでそれに追隨した意見が多く見られる。戦後とは勿論、太平洋戦争後のことであるが、その見直し論の要点は日本による戦争開始の正当化に集約される。つまり、日本は好んで戦争を始めたのではない、仕掛けられたのだ、責任は自分にはない、相手にあるという理屈である。しかし、その始まりは日本による韓国併合や中国への侵略による傀儡満州国建設を都合よく既成事実として不問にし、満州国の国際連盟による承認問題から始めるのである。満州国を世界が承認しなかったために日本は中国から攻撃を受けた、そしてそれを防衛するため戦った、さらに中国の国民党や共産軍とも講和を申し入れたがそれを拒否された。さらに、アメリカとの開戦では、例のハルノートによる交渉の決裂を満州国の存続をみとめなかつたから仕方なく始めた、と全て相手の責任に転嫁している。

最近はいくつかの主張を歴史修正主義と言いたい。この言葉自体は完全な議論封じのためのレッテル貼りである。それは少し違うがしばらくはそう呼ぼう。現在の歴史観は彼らに言わせると自虐史観になるらしい。「自虐」とは自らが自分を痛めつける、責めることであり、対義語は「自尊」、つまり自分で自分を優れたものと思ひ込むことつまり「うぬぼれ」である。歴史の結果の善悪を評価する場

合、その歴史を作った主体とその歴史を受けた他者の判断が異なるのは、そもそもそれを評価しなければならぬという状況そのものからして必然である。なぜなら両方が一致しているときはそもそも評価などという判定は必要ない。「自虐史観」と批判する側の「自尊史観」に欠けているのは「他者」の立場である。

人類が進化して賢明になったかという、と、「歴史」は「それ程は」と答えを出す。確かに、相互共存をめぐる闘争において武力で相手を屈服しつくすということは少なくなつたが、それでも理性による話し合いは戦いの決着の後である。闘争の武力的解決手段である「戦争」というものには必ず勝者がいる。そして当然、その後の歴史論理は「勝者の論理」になり、敗者はその論理を承認せざるを得ない。それが「暴力」による強制である「戦争」の役割である。すべて歴史はそれによつて作られている、それが「正史」になる。「自尊史観」が尊ぶ「天皇制」も「天皇家」を担ぐ勝者の歴史であり、「古事記」「日本書紀」は勝者による「自尊」の歴史記録ではない。

本来の「自虐史観」というのはいまや自国の歴史となつた「正史」を否定することのほずなのであるがどうもその批判者「自尊史観」は内容が振れているように思われる。「自尊史観」も「正史」自体が「誤り」であるとしている点にある。その意味するところは「勝者」の論理を認めない、つまり戦争の「敗北」を認めないという論理である。もともと「正義」は自分の側にある、それを脅かされたか

らやむを得ず戦ったけれど敗北した。しかし、負けたからといって「正義」が負けたわけではない。この歴史観が冒頭の「歴史修正主義」といわれる発言につながっている。いわゆる「東京裁判」否定史観である。勝者の論理で導かれた「判決」は不当だとするのである。しかし、歴史的に考えてみればこれは普通のことであり戦争による「勝者の論理」に変わりはない。やはり残るのは「敗者」の「正義」であろう。しかし、その正義として「勝者」の正義とは変わるものではない。

そもそも、歴史において「正義」というものは絶対的なそれではない。あくまで「勝者」において正しいとされることだ。具体的に言うと、第二次世界大戦での西欧諸国におけるアジアの植民地政策つまり「帝国主義」も悪であり、その悪に向かった日本が「正義」ではなく、これもまた帝国主義として悪なのである。つまり悪に対するものは必ずしも正義ではない。悪対悪もあるのである。植民地化された「他者」にとつては悪が交代しただけである。このことでよく言われる日本のアジア解放論。すなわち「日本が占領していたところはいち早く独立し、感謝されている」とのよくある話。しかし民族自立権の論議はすでに第一次世界大戦後のヴェルサイユ条約の流れであり世界の潮流であった。日本が解放したのではない。遅れてやって来た「帝国主義」が日本の実体であろう。

さて、件の座談会はこれで終わったのであるが、私は少しこのような最近の歴史観について更に調べてみた。そして驚

いたのは巷にあふれる「謀略論」である。例えば、太平洋戦争はルーズベルトが起こした陰謀であるというものである。実はこの論が元になって数々の陰謀論が出ているが、先ほどの先生が読まれている本もここからもたらされた可能性が高い。アメリカは本来、建国の主旨からして自主独立性の高い国で他国に対する干渉主義であるという。なるほど現在のトランプ政権がいうことも一致している。しかし、「イルミナティ」であるルーズベルトは「陰謀」をもって世界大戦に参加したという。その口実をドイツと日本に探していたというのである。

さて、この「イルミナティ」とは何なのか。それこそ「陰謀団体」であるからその正体は不明なのであるが、なぜか正確にわかっている。十八世紀ドイツで絶対主義王政やカソリック教会に対抗するために作られた急進的啓蒙、自由思想団体である。これもまた三大陰謀団体とされる「フリーメーソン」と合流しフランス革命の原動力になったといわれている。その思想はかなり極端で「新世界秩序」を目的とし、国家、家族、民族などあらゆる現行秩序の破壊を行う。そして私有財産や家族制度の否定も伴う。そのような団体が今現在まであるかどうかはその「陰謀論」なのであるがとにかくそのように語られる。つまり、この団体のメンバーであるルーズベルトはアメリカを世界の混乱に巻き込んで「新秩序」建設の第一歩とするために参戦したという訳である。一見、なんと馬鹿な話だと思われるが、これが「陰謀論」なのである。

しかし、この「陰謀論」は私達の普通の考えにも少しずつであるが密かに浸透してきている。

先に三大陰謀論といったが、二つ目が有名な「フリーメーソン」である。これも歴史は明らかで最初は十七世紀頃、石工職人の同業組織から始まったらしい。彼らは建築技術者であり、国を越えて移動し技術を伝えていった。その折に様々な知識も吸収し、時代が経過するに伴いその技術的要素は切り離されサロンのな議論の場となったらしい。そこでは国家や宗教に拘束されない思想が生まれ、先に話したようにフランス革命の言動力にもなった。なおこの団体は現存していません。この、いまもあるということが「陰謀論」の「本当そう」の根拠にもなっているのですが。

さて、三大陰謀論の本命は三つ目の「ユダヤの陰謀」である。この陰謀論こそが西欧近代社会成立の「トラウマ」になっている。現代社会にもある「現状否定」「歴史修正主義」の論理の原点でもある。ユダヤとは言うまでもなくユダヤ教のことである。しかし、奇妙なことにユダヤ人の定義は多様である。勿論ユダヤ教を信仰する人々であるが、それはある特定の民族を指すわけでもない。そもそも、このユダヤとは西欧キリスト教社会が成立してからの異教徒としての総称でもある。本来、キリスト教はユダヤ教をベースにしている。それがなぜ異教徒になるのか。その歴史は過去に遡るがキリスト教はやはりユダヤ教との「決定的な対立」から生まれている。どうしてもそれが「ト

ラウマ」になるのである。さらに西欧における近代化は一見すると反キリスト教とも受け取れる。キリスト教カソリックによる広域支配は近代の地域を区分した独立した国家とは対立するし、さらに国家以前のユダヤ共同体を喪失したユダヤの民がもつ反国家思想や選民思想は激しく近代国家と対抗する。

ここで生まれたのが「ベニスの商人」に見られる「醜い、金の亡者ユダヤ人」のイメージである。「契約」という商取引は、もともと流浪の民であった彼らが、何時また会えるかも分からない人々との取引を確証するための手段であったし、「利息」は「手数料」であった。だからキリスト教はそれらを卑しい仕事として誰も手を染めなかったのである。近代以前は主要な仕事は第一、二次産業であり、それが国家戦略そのものであった。これは現代のアメリカ社会の構造を見ても明らかである。よくアメリカのメディアはユダヤに牛耳られているといわれるが、それは逆である。ヨーロッパからアメリカに渡ったユダヤ人はやはり国家の主要部門である第一、二次産業からは締め出されていたのである。だから第三次産業に流れていった。結果的にそうなのである。

このように、近代以前の西欧キリスト教社会はユダヤ迫害を繰り返した。魔女狩りからホロコーストまでのような迫害の歴史は多くがこのキリスト教社会に対する振れた被害妄想の歴史でもある。迫害があまりにも強烈であったので「あるかもしれない」その仕返しにおびえるというのが「被害妄想」である。これは、

現在の日本における「中国」「韓国」「韓国」嫌悪にも共通する。中国や韓国が日本に攻めて来るかもしれないという「被害妄想」である。これは「過去」にそれらの国々をいかに強烈に迫害したかという裏返しでもある。アメリカが攻めて来るという「妄想」は決して抱かない。

近代というのは中世の次に成立した社会のことである。本来自然そのものであった「神」の存在は「古代社会」では個人と一体であった。それが「中世社会」になると「神」が「自然」と「宗教」に分離され、さらに教会や僧侶という媒体が挿入される宗教的世界観が生まれた。(個人―教会―神)の三位一体世界は、やがて教会が専制君主と結びついた支配機構の論理になる。教会の役目が国民国家とつてかわり「迷信」や「偏見」から解放されたはずの近代人であったが、依然として神の位置が喪失されたままであった。本来はそれが「人類共通」の「理念」になるのであるがそれはいまだ達成されず支配機構に代わった国民国家が作り出す偏狭な「目標」を「理念」としているのが現象であろう。これが現在の「自国ファースト」主義であろう。ここでは「異質」は排除されよそ者は反動とされる。このような閉鎖的、自己目的社会は当然「閉塞感」を伴う。個人は人間であり人類であるから本来共通の目的、理想を持たなければならないはずである。しかし、この共通の目的や理想自体を持つこと自体が逆に「陰謀」を持つことになってしまっている。現在の「陰謀論」の多くは反「世界主義」「理想主義」「平和主義」

であるように思われる。「武力によらない平和」は「世界支配者」の「陰謀」であるというのである。「理念なき」経済中心のゆがんだ「グローバル」路線を邁進した結果、それが破綻し反動で自己孤立に戻ってしまったのが現代社会の現在である。「自国優先」「ファースト」主義は「排外主義」と同義語である。

複雑化する現代社会を一分分りやすく説明する「陰謀論」は受け入れやすい。そして、もやもやしている現代社会に対する反発は「反発する自分」と同化しやすい。そして自分だけが知っているという優越感や信じ難いものを信じるという人間の心理にびつたりする。特に現代のインターネット情報社会は自分に関心のある情報だけを数多く集められ、反対意見は簡単に除外検索できる。そして同じ情報を変えて簡単にコピーされるため多数意見として信じてしまう。つまり自分に都合の良い意見が多数として安心し、反対意見を排除するのである。「デマ」の論理もこれと同様で広まる。「否定主義」つまり「ホロコーストはなかった、南京事件はなかった」などはすべてこのようにして作られる。

健全な「懐疑主義」は必要である。現実の歴史では当然まだ分からないもの「隠されているもの」はある。それが「陰謀」かどうかはわからない。そもそも「陰謀」とは「結果論」であって、全てのものの始まりは何かを「意図」する。本意を隠して「意図」するのが「陰謀」であるとすれば全ての政治取引は「陰謀」ということになる。しかしその最初の「意

図」がすべてその通りの「結果」になるのかどうか。これは誰にも分からないしそもそも歴史を特定の個人や団体の「意志」で動かせるとする考え自体が先に述べた「正史」の論理だけを信じている現状肯定の「素朴歴史観」である。

最後に評論家であった加藤周一の言葉を紹介しよう。歴史や社会に自然科学的実証主義の論理を適用するのは間違っていると断言している。歴史や社会における「事実」は全部でなく「一部」でありしかもそれは「再現不可能」であると。確かに新聞ニュースの報道は「事実」の一部である。そしてそれは確かさの「質」も一定していない。だからといって「判断停止」するのは間違っていると断言する。その行為は「現状肯定」を意味するからであると。我々がすべきことは情報の不足、つまり「権力者にとって都合の悪いところ」を「想像力」によって補うことであると。その方法は反証をまったく受け付けない「陰謀論」のものではなく「健全な懐疑論」である。

現代社会は一見複雑になりすぎて人々は「単純」「明解」「直観」「身近」「即効」的なものを求めそれらから離れたものを「思考」「想像」し「理解」「承認」すること避けている。そして「近代」自体の否定が先祖がえり「昔」は良かったという幻想に取り付かれる。「昔」とは皮肉にも単純そのものの「身分制固定社会」「神話・迷信」のピラミッド支配社会である。現政権の昔は「大日本帝国」である。問題は未だ「近代」を先祖がえりではなく「超克」できていない現代人である。

大峯奥駈道(9)

梵店主

よっちゃんは、六甲全山を歩くことが出来て自分に自信が湧いてきた。そんな時に、後輩の大江君から愛宕山の千日参りに行きませんか誘いをうける。正月と違つて真夏の七月末の愛宕山である。彼が言うには、ものすごい汗が出るから着替えを幾枚も持ち飲み水もたくさんいるという。その日に参れば千回参つたことになるという有り難い行事らしい。よっちゃんは体力に少し自信が持てたので、彼の誘いにのることにした。

初めての千日参りなので同級生の片山君も誘うと、彼も初めてで興味があるのか行くという。三人は昼に四条大宮で待ち合わせて、まずは腹ごしらいで近くの王将へ行きビールと餃子を頼んだ。ビールを幾杯か飲んでカンカン照りの外へでると、ビールのためか汗が噴き出してきた。

片山君は、サッカーが好きだから体力があると思ひ誘つたのである。彼もそれなりに自信があるとみえ、ビールをガソリン代わりやと幾杯も飲んでみた。

電車とバスを乗り継ぎ清滝の登り口に着くとテントやのぼりが立っていてお祭り気分になる。最初は急な登りが続き汗がタラタラと落ちてきた。ずいぶんいろんな人が登ってくる。

三時間はかりで社に着いたが、衣服は汗まみれ、地面は雨でぬれていて地べた

には座りにくい、立つてはいられないので本殿の脇にある石垣に座る。もう人が多くて早く座る場所を確保しないと無くなるような人数である。

それからが大変だった。これまで経験したことがないような時間を過ごさなければいけなかった。深夜二時に執り行われる神事を見るために冷たい石の上に座り続けなければならなかった。

しかし、贅沢は言えない。あとから登ってくる人は、地べたに座っているのだから。

石に座って眠りたいのだが眠れない。何とかして眠りたいから、片山君が社務所で売っているお神酒を買ってきて回し飲みをする。しかし、眠れない。

そうして待つこと七時間、やっと真夜中の神事が始まりそうなきわつきが起きた。是非とも見たいと人ごみを割って前に進み人の流れに紛れ込んだ。人に押されるように神殿の中に入ったが座る場所がない。立ちつくす感じだ。

とつさに「こりやえらいことになった、もう神事はいから外へ出たい」と思ったが身動きがとれない。そうこうするうちに厳かな神事が始まった。直立不動で立っていなければならなくなった。

もう神事を見る元気はどうに失せ、何とか早く終わってほしい、その一念だけが頭を駆け巡る。寝不足と湿気とでもう倒れる寸前である。

じつと耐えて一時間あまり、やっと終わった。さあ、すぐにでも帰ってシャワーを浴びて寝たい。しかし、清瀧からの

始発バスは六時ぐらだから、ゆつくりと下りる。途中で動けなくなった人を救護するために消防団の人が多く登ってきた。タンカで下すのだろう、二十人ぐらいはいた。本当にご苦労さんだ。

清瀧からバスに乗って嵐山駅に着いた。ふだんなら片山君を誘ってビールでも飲もうかとなるのだが、さすがに疲労困憊で飲む元気はなく電車に乗って別れた。

こうして初めての千日参りは無事に終わったのだが、私には大きな転機になったやり取りがあった。それは、四条大宮から嵐山へ向かう電車の中で大江君が言った言葉である。

「大江くん、登ってみたい山はどこや」「そうですね、大峰の奥駆けを歩いてみたいですね」

「そうか、それだけ魅力的か」この一言でよつちゃん、奥駆けを知り関心を持つようになったのである。山をよく知る大江君が言うのだから、きつと面白い山にちがいないと考え出した。

日本には無数の山がある。好き嫌いは、その人によるだろうが、山岳部の後輩で学識もある彼が魅力的だというのだから間違いない。よつちゃんは、大峰奥駆けを次の目標にしようと、その時に決めたのである。愛宕山から大峰山へ飛躍したのだ。

連載「おつちよこチヨイぼけ」(49)

——昭和女、どっこい日記——

この危機を招いた責任者、

出てこい……の巻

キタの兄殺しの「將軍様」と、米の金髪の暴れん坊のヒビと。この世で最も、リーダーになってはいけない二人が同じ時代にトップの座に居るために、韓国と日本が「もしかしたら戦禍に巻き込まれて、どえらい被害をこうむるかもしれない事態」に陥っている。

それなのに、私たち日本人、とつても呑気。私もノンキ。どれぐらいノンキかというと、この間(四月二十九日)の早朝、目を覚ましてすぐにテレビをつけたら、ちょうど菅官房長官が「国民の皆さんは落ち着いて行動して下さい」と言っていた。さすがに「えっ?」と耳をそばだてたが、「午前五時半ごろ、北朝鮮が弾道ミサイルを発射、失敗して北朝鮮国内に落下したとみられる。情報を収集しているが、国民の皆さんは落ち着いて行動して下さい」と繰り返して、「失敗か…、よかつた」と思った次の瞬間、もう

一回、布団に入ってぐっすり寝た。「落ち着いて行動しろ」と言われて、せめて身支度ぐらいしておくべきかと思いはしたが、「フンだ、あんた(キタの…)なんかに、右往左往させられる私だと思ふなよ、ばかめが!」と二度寝。母に言わせれば、「それは単なるぐうたら!」と切り捨てられそうだし、確かにその通り

なのだが、呑気は呑気だと思ふ。

キタのどこに落ちたのだから、その住民に被害はなかったのか。眠りに落ちる前、さすがに少しだけ考えた。失敗でなくて、日本に着弾していたら、私は一体、どうしたんだろう。母に電話して安否確認。電話、つながるのだろうか。次に、財布にありつたけのお金を入れる。ハンカチやタオル、着換え、歯磨きセットを普段使っているリュックに入れて…でもそこからどうするんだろう? テレビでアナウンサーが「ただちに安全なところに避難して下さい」と絶叫していても、それが具体的にどこなのかわからない。津波のときは、近所の中学校なのだが、ミサイルの場合は?

怖いのは火の海になったときだけ…とそこまで考えて、「やっつけられん、寝よう!」と寝た。本当にぐっすり眠り込んだ自分が怖い、だってほかにどうすればいいのだ。

起きて、朝ご飯を食べて、友だちに電話をしたら、「え、また北朝鮮が? テレビつけてなかったから、知らなかったわ」と私以上に呑気。「焼け死ぬとこやったデ、アンタ」と二応、注意喚起しておいたが、危機管理能力がここまで欠如していたら、逆に安全かもしれないと思つた。

気分は、どこまでもどこまでも平和。ニュース番組では毎日、北朝鮮問題を取り上げているが、「本当に平和的な解決の道を見つけてもらいたいものです。さて次は、大声でお隣さんを威嚇した男性が再び、逮捕された事件です」「米朝の緊張

はさらに高まったといえます。では次のニュースです。ゴールデンウィークに入り、各地で渋滞が…」と、次の話題に移るあたり、国家存亡の危機が差し迫っているとは思えない。ま、騒いでも、ジタバタしても仕方がないわけだけど、みんな普通に暮らしている。お花見に行き、ゴールデンウィークに海外旅行に行き、帰ってきたときには核爆発で日本が消滅しているかも、という心配をだれもしていないみたいだ。

もちろん、一部の人たちは抗議デモをしたり、本気で核シェルターの購入を検討したりしているようだが、私のまわりの人たちは「まさか、核のボタンは押さるんやろ」「ミサイルで脅かしているだけや」と冷静なんだか、無知なんだか、やたらに樂觀的だ。

なかには、「私、親も死んだし、貯金もないし、そういうことでバツと死んでもええんちゃうかなと思ってるヨ」という厭世的な独り暮らしの友だちもいるが、それはちよつと…。

孤独死はイヤだが、一斉死なんて、私はずっとイヤだ。冗談じゃない。

なぜ、キタのブサイクな肥満児に殺されねばならないのだ。その怒りで、私はきつと成仏できない。ミナミの男前にならないのかというと、それも違うけど。

トランプさんが大統領になってから、本当にロクなことがない。私があれば言ったのに（「芥川だより」で、安倍さんが犬のようにしっぽを振って、すり寄ったために、キタは警戒心を強めた。最

近になって、トランプさんはキタの若造を「若くして権力を握った、とても伶俐な人物だ」なんぞと手のひらを返したようなことを口走って、米朝協議に持ち込もうとしているようだけど、そんな見えすいたお世辞でキタが態度を変えるか？変えてほしいけど）

トランプさんの行動は行き当たりばったりで、しかも「アメリカファースト」だから、とても不安だ。たとえば、シリア攻撃。サリンを使うなんて非道だから、そのことに異議を唱えるのはいいのだけれど、待ったなしの爆撃ってどうよ？しかも、そのせいで、キタのブサイクが過激に反応して、今の事態ではないか。危機にさらされているのは、韓国と日本。それなのに、日本の結構、学のある男たちが「カール・ビンソンを動かして、日本を守ってくれている」なんていうんだから、本当にオメデタイ。

あれを動かすのに、どれぐらいお金がかかるかと思っているのだ。絶対に日本がその費用の何割かを負担させられる。米兵の事件費だっているし、今後の修繕費まで「ニッポンも払うべきだ」と言われるぞうだ。巨大な原子力空母を頼もしいとは思わない、と言ったら、キタの脅威がある今、嘘になるけれど、イイ年して手放して賞賛するなんて、常識を疑う。あれを動かして、儲かるのは軍事産業の経営者ではないか。その片棒をかがされるのは「めんだ、ぐらいの見識を持つべきなのに、子供がプラモデルを見るような目で見ていてどうするのだ。ああ、頼りない！

カール・ビンソンに殺られると怯えたキタの肥満児が「死なばもろとも」と核のボタンを押したら、地球が減びかねない。だって、日本には稼働していてもいなくても原子力発電所が五十七基もあるのだ。これらが制御不能になったら、放射能の灰が全世界を覆うのではないのか。そうなれば、地球の裏側の国まで、きつとタダではすまない。白血病が激増し、食べるモノが汚染されて…地球滅亡映画の世界のようになってしまふ。

もし、そんなことになったら、トランプ大統領と金正恩委員長と安倍総理は人類史上最悪の為政者ということになる。もちろん、中国の習近平国家主席もロシアのプーチン大統領も同罪だ。ついでに、関西電力の社長さんはじめ、原発を推進しているビジネスマンも地球を滅ぼした責任者だからね。もう地球は滅びてしまっているんだから、責任もへチマもないと思われるかもしれないが、魂は永遠というではないか。少なくとも、私は死んでもぜえつたいに許さないからね皆さんもそうでしょ？

(A0)



大人の今昔物語 (33)

石川 吾郎

今回は殺生を生業とする鷹使いの家譚。迫力に満ちた表現をみる事ができます。過酷な内容なので、教科書に出ない度は三／五。

西の京の鷹使いが出家する話し（巻十九ノ八）

今は昔、西の京に鷹使いを生業にする者がいた。名を某といった。息子たちが数多くいた。その息子たちにも鷹使いの技を念入りに教えていた。鷹のことがたとえようなく好きであったので、寝ても覚めてもこのことより他のことは考えなかった。夜は腕に止まらせ座り明し、昼は野に出て雉を狩りして暮らしていた。その家には七八羽の鷹を止まり木に並べていた。狩り犬を十四二十匹繋いで飼っていた。若い鷹の訓練をする夏飼のころには、生き物を殺すこと、その数を知らない。冬には何日かごとに野に出て雉を狩る。春は「鳴き鳥を合わす」といって、夜明けに野に出て、雉の鳴き声を聞き、その居場所を特定し、それを狩るということをしていた。このような生活を続けて、この者は老年に達しようとしていた。

ある時この者、病にかかり気分が悪く、寝られない夜をすごして、明け方になってようやく寝付いた。

嵯峨野に大きな古墳があり、その中に自分は長年、妻と子たちと住んでいた。

寒さに震える冬を越して、ようやく春の節句のころになり、日差しがうららかに照る日、ひなたぼっこをしよう。そして若菜を摘もう、と妻と子供たち総出で、古墳の外に出た。暖かさに誘われ、子供たちはある者は若菜を摘み、ある者は遊び戯れ、知らぬ間に家から遠くへ離れていた。

そうする内に、太秦の北の森から、多くの人の声が聞こえてくる。鈴の音も大きく小さく聞こえてくる。これを聞くと、胸騒ぎがして、嫌な予感がして、高みに登って見てみると、錦の頭巾に斑らの狩衣を着て、熊の毛皮の行騰（乗馬の時の脚覆い）を付け、猪の斑らの鞞覆いの太刀を履いた者が、鬼のような形相をした鷹を手に据えている。その鷹には高く鳴る鈴を付けている。鷹がはやって飛び出そうとするのを制しながら、足の速そうな馬に乗り、数人で嵯峨野方面に散り散りになってやってくる。

その前には、狩猟用の藺笠（いんがさ）を付けて、紺の狩衣を着た者が従っている。腕には赤い革を袖にして、袴も革を使い、膝にプロテクターをして、革沓を履いている。彼らは杖を使い、獅子のようにどう猛な猟犬に大きな鈴をつけ、これが鳴る音は空にまで響きわたっている。また犬たちの足の速さはハヤブサのようだ。これを見ると、暗澹とした気持ちになり「早く妻や子供を呼び寄せ、隠れねば」と思うが、いかんせん子供たちは散り散りに遊び惚けて、呼び返す方法がない。無我夢

中で藪の深みに身を隠して、そっと見ると、愛おしい長男も藪の中に隠れたところだった。

そうするうちに、犬飼いと鷹飼いは、野原に出てバラバラになった。犬飼いは杖で藪を打って、多くの犬を放って、獲物を探させる。

「ああ大変だ。どうしたらよいのか」と感っているうちに、この長男の隠れた藪に、一人の犬飼いが近づいていく。これが杖で藪を打ち据えると、生い茂ったスキは折れて倒れていく。猟犬たちは鈴を鳴らして、鼻を土にすりつけて嗅ぎ寄ってくる。「もう絶対絶命」と見るころ、長男は耐えきれず、空に舞い上がった。

同時に犬飼いが叫び声をあげる。少し離れてたところにいた鷹飼いが、鷹を放ち襲わせる。長男は高く飛び上がり逃げていく。鷹は下側から急迫する。長男は限界に達して下降してくると、鷹は下から長男の頭と腹を掴み、絡み合っとうと落ちる。そこに犬飼いが走り寄って、長男のクビの骨をねじり折る。この間に長男の悲鳴を聞く。生きた心地がしない。刀で心臓を割かれるような気持ちだ。

「次男はどうしているだろう」と見ると、次男が隠れている藪の方へ猟犬が嗅ぎ寄っていく。「ああ」と思うほどもなく、猟犬は次男を夾んで襲う。次男は惑乱して羽ばたくが、すぐに犬飼いが走り寄り、クビの骨をねじり折る。

三男はどうしているかを見ると、隠れている藪にまた犬が嗅ぎながら近づいて

いく。三男も耐えられず飛び上がると、犬飼いが杖でもって三男の頭を叩き落とす。

子らは皆死んでしまった。せめて妻だけでも生き残ってくれと祈って見ていると、いまだ犬飼いが来る前に妻は飛び立って、北の山の方面に逃げていく。鷹飼いをこれを見つけ、鷹を放って同時に馬を走らせる。さすがに妻は逃げるのが速く、離れた松の木の本の藪に飛び込んだ。犬たちが続いて、妻を挟み撃ちにした。

鷹は松の木にとまっていたので、鷹飼いはこれ呼び戻した。その後自分の隠れている藪は草の背たけも高く、茨も生い茂っており、その中に奥深く潜んでいたが、五六匹の犬が鈴を鳴らして自分の藪の方に向かってきた。自分も我慢できず、北の山に向けて飛び出した。空には何羽もの鷹が高く低く飛んで迫ってくる。下には多くの犬が鈴を鳴らして追いかけてくる。鷹飼いは馬を走らせて迫ってくる。犬飼いは杖で藪を打ちながら迫る。かろうじて深い藪に落ちるように飛び込んだ。鷹は高い木にとまり、足につけた鈴を鳴らして自分の居場所を犬たちに教える。犬は鷹の教えるところを嗅ぎ分けて追ってくる。

ついに逃げ場がなくなった。犬飼いの叫ぶ声が雷鳴のように響いてくる。万事窮す。どうしようもなく、自分は湿った藪の地面に頭を隠してじつとうずくまっていた。犬が鈴を鳴らして襲ってくる。もうだめだ、と覚悟したときに、夢か

ら覚めた。汗みずくになって「夢だったんだ」と気づいた。「これは自分が日頃鷹を使つて狩りをしてきたことをそのまま夢に見たのだから。長年殺してきた雉たちは、今夜の夢の自分のように悲しい思いをしてきたことだろう。限りない罪を作ってきたことだ」と、その夢の真意をたちまち理解した。夜の明けるやいなや、鷹の小屋に行き、並べて繋いでいる鷹を、すべてその足の紐を切り放してやる。また犬の首縄も切って、みな解放した。鷹と犬の飼育道具などもすべて取り集めて目の前を焼いてしまった。その後妻と子供たちに向かい、この夢のことを泣きながら語ってきかせ、自分はすぐにも貴い山寺に行き、髻（もとどり）を切つて、僧侶となった。

その後、一心に修行をして、聖人となり、日夜念仏を唱え、十年あまり経つて立派な最期をとげた。まことにこれは貴いことだよと、言い伝えられているとか。

《コメント》

第十九巻は、出家譚が集められていますが、この話には鷹使いの出家譚。襲われる雉の立場になった描写のビビッドさ、その迫力は、驚くばかりです。乱世に生きるこの記録者が、燭台をまえにして、ほの暗い僧坊の中で想像力の翼を広げている姿が、ありありと想像できる気がします（この「今昔物語」の記者は、比叡山などの僧坊の僧侶ではないかという説があります）。

明石 幸次郎

明石は、宇都宮工場からタクシーで駅に向った。東北新幹線、大宮から在来線を乗り継いで、やっと東京駅から東海道新幹線に飛び乗った。

品川辺りを通過した時、周りの人達が夫々買い込んで来た弁当を開きだし、缶ビールを飲み始めた。

明石も負けじと、キヨスクで買った缶ビールとつまみを取り出し、車窓の風景をぼんやりと眺めながら、ビールを飲んで、今日の仕事を振り返った。

自分で考え、決して主体的に動いたのではないが、周りが動きだし、その流れに自分が乗せられて行ったことで、何か先の見通しが掴めて来た様な気になって来た。

その為か、輸出部に来て二日目にして、これからも、落ちこぼれにならずに何とかやって行けそうな気がした。

単細胞で、楽天的な明石は、それで安心したのか、ビールを飲み干した小田原を通過した辺りから、ウトウトとして、後は深い眠りに入ってしまった。

目が覚めたのは、降りる人でざわざわし出した、列車が名古屋駅に着いた頃であった。大勢が降りた為、満席であった車両は、半分が空席になった。それから新大阪までは、一時間余りあったので、靴から単行本を取り出して読み始めた。米原を過ぎた辺りで、時計を見ると今夜

の歓迎会には、七時前に行けると思うと同時に、挨拶をしないとけなないと気になり始めた。

何を話したら、受けるかを考えたが、工場から来た海外には疎い田舎者と思われるのだけは、嫌だと、B級サラリーマンの劣等感と、その裏返しであるプライドだけが、沸々もたげて来た。

暫く考えても気の利いた事は、何も浮かんで来なかったが、辛うじて、宇都宮工場長が「輸出を増やして欲しい、その為には何でも協力する」と言われたことが脳裏に残っていた。

これを引用して、自分の使命はこの工場の要望に応える事と、本社資材部で輸入をしていた経験があり、輸入と輸出はコインの裏と表で貿易実務の「インコートム」位は理解し、コレポンも出来る。この経験を生かしたいと、能ある鷹は爪を隠さずのな？挨拶をしようとノートに原稿を書きだした。

ざっくりと書き終えると、車内アナウンスが、次は新大阪、新大阪で、忘れ物が無いように降りる支度をして下さいとの、おせつかいとも急かすとも聞きとれる車掌の甲高い声が聞こえて来た。明石は、条件反射的に素直に従うような動作に移った。

鞆を抱えて、トイレに行き、その後、アルコールと居眠りでポーとした頭を覚醒さそうと、顔を何度も洗った。それから直ぐに出口に近いドアに向かうと、列車がホームですつと止まり、直ぐにドアが開いたので、飛び出す様にしてホーム

に出て駆け足で階段に向った。

何人かは急いで階段を駆け下りたので、明石も負けじとその後に続いて降りて、真つ直ぐ改札を出て、地下鉄の乗り場までの長い通路を人波を掻き分けて、小走り駆けて行つた。

途中で息が切れてきたので、立ち止まった。自分が五分、一〇分早く宴会場に着こうと、歓迎会は既に一時間前から始まって盛り上がり過ぎており、仕事で遅れて到着する自分を気にしている人は誰もいないと思うと、急ぐ自分の小心さにアホらしくなって来た。丁度、公衆電話があったので、店に電話を掛けて、幹事のN川に新大阪に着いたので、今からそちらに向かうと、伝言を託した。

電話を終えたら、急ぐ気が収まり、ゆっくりと歩いて地下鉄の券売機までたどり着いた。難波までの切符を買って自動改札を抜け、ホームまでの階段をゆっくりと上がると、ゴウオーという音と共に、天王寺行きの電車が入って来た。電車に乗り込むと、席がパラパラと空いていたので、ドアに近い処に座った。

座席に座ると、車内は東京の地下鉄と違って、何となくまったりとした雰囲気を感じられ、ああ、やっと大阪に帰って来たと言う気分になった。

しかし、これから、歓迎会と言う仕事が残っていると思うと、疲れた気分になった。そして、このまま家に帰えることが出来れば、何と有難い事であるかと一瞬思ったが、思い直して、挨拶の原稿に目を通しながら、暗唱しかかった。

梅田駅と次の淀屋橋駅で車内はぎゅうぎゅう詰りになったが、ドアの近くに座っていた明石は難波駅に着くと、直ぐに降りることが出来た。ゆっくりと自動改札を通り、地下街の行き過ぎる人に注意をしながら、一〇分程歩いて、指定された店に着いた。一呼吸を入れて、ドアを開けると、宴もたけなわと見えて、大きな笑い声が聞こえて来た。

若主人が直ぐに寄って来て「明石さん、エライ転勤早々、忙しそうですね。どこで油売って来られたんですか？本社資材で暇そうにしておられた頃とは、エライ違いますやんか？大丈夫ですか？まあ、皆さんがお待ちかねですよ！」と笑いながら言われた。「東京と宇都宮で油を売り過ぎたので、今日は、もう油切れで、もう宴会はもたへんで！家に帰ろうと思っただけ、お勤めやからしやうがないわ」と答えたら、「アホな事、言うたらあきまへんで！幹事のN川さんが、言われていました、今日は明石さんの歓迎会で、主役らしいですね？めったにない主役ですよんか。家に帰ったらあきまへんで」と言われ、しぶしぶ笑い声のする部屋に入ってしまった。



正倉院の宝物にはいくつかのガラス器がある。最も有名なのは六世紀にササン朝ペルシアで作られるばるとシルクロードを越えて我が国に伝えられた白瑠璃碗であろう。ササン朝ペルシアの王が臣下の貴族や豪族に下賜するために特別に作らせた非常に特殊な品だということはわかっているのだが、それがどうして日本にあるのか、まったくわからない。謎の多い品である。しかも、これほど有名な白瑠璃碗だが、どういういきさつで正倉院に収められたか、これもまったく分からない。この白瑠璃碗に限らず一つの例外を除いてガラス器のすべてがどういふ経緯で今に至ったのかよく分らないという。では、そのたったひとつの例外とは何か。それは「紺瑠璃壺」である。

『東大寺別当次第』の、六〇代伝燈大師朝晴の項に

治安元年 三味堂供養。

十月一日、前左衛門尉平致経、施入、

紺瑠璃壺

とあり、治安元年(一〇二二)に伊勢の豪族平致経が東大寺に奉納、後に正倉院に納められたとみられる。高さ九センチ、口径は一一・七センチ。材質はソーダガラスであること、技法の高度さから、西アジア製である可能性が高いが、デザインには北宋の影響が見られるといわれる。用途は「痰壺」である。宝物が「痰壺」

となるといささか気落ちするが、ここでもこれ以上深入りはしない。

この「紺瑠璃壺」を施入(寄付)したのが平致経。しかし平致経といっても御存知の方はまずいないだろう。彼は日本史の教科書にその名が出てくるような人物ではないが、十世紀から十一世紀頃の萌芽期の「武士」をどう考えるかという点では歴史家の間では有名な人物である。いま軽い気持ちで「武士」と書いたが、萌芽期の「武士」は私たちが思い浮かべる武士たちとは少し違う。もちろん戦闘能力を持ったプロの戦士であるのは同じである。しかし、平安時代にあつては、どんな小さな「武士」でも主君から与えられた領地ではなく自らの力で荒地を切り開き、周囲の豪族と戦って自分のものとした所領を持っている。地方(歴史家は「在地」という)にあつてはたとえ狭い土地だとしても領主であり、一方では弓矢や太刀などの武器・武具を駆使する技術を持った戦いのプロであるという二つの側面を持っていることを理解しないと、この時代の「武士」のことはよくわからない。誤解を避けるため、以下、この時代つまり一〇世紀から一一世紀にかけての「武士」のことを「兵」と呼ぶことにする。

その「兵」の一人が平致経である。この人の名前は思わぬ所にその顔を出す。「今昔物語」巻二十三第十四話「左衛門尉平致経、明尊僧正を送りたる語」である。ここに出てきた明尊僧正は「書」で有名な小野道風の孫にあたり、晩年には

僧侶としては最高位の大僧正になり天台座主にもなった人物である。そして、撰関家からの篤い信任を得ていた。彼は藤原頼通がまだ二十歳の頃から護持僧を勤めており、九十歳になった時には頼通の白河別邸で盛大な「九十賀(九十歳となった祝賀の会)」が行われている。その場で六十八歳になった頼通が「その護持の力によりて此の愚昧の身をまつとうせり」とその席上で讃えたというから最大級の信頼を寄せていたといってもよいだろう。

では、「今昔物語」巻二十三第十四話「左衛門尉平致経、明尊僧正を送りたる語」のあらすじをざっと紹介しよう。

ある日、明尊僧正が夜居(加持・祈祷のために僧が傍らに詰めていること)の僧として頼通の邸宅である高陽院に詰めていたとき、どういふ事情なのか、宇治殿(藤原頼通)が三井寺に使いして夜のうちに戻るようにと明尊に命じた。夜のことなので、

明尊一人では危険である。「誰か護衛役に適当な者はおらぬか」と宇治殿がいわれると侍が一人「致経がおります」と名乗り出た。彼の名は左衛門尉平致経。「それは好都合」と致経に供を命じられた。致経は最初「賤しき下衆の男ひとり」だけをともない、しかも本人も徒歩姿であるので明尊を不安がらせる。しかし、「黒ばみたる者の弓箭を帯せる(黒装束で弓矢を帯びた)」騎馬の郎等を町の辻々で無言の

うちに合流させ賀茂川を出るころには三〇余人になつていた。「奇異くするものかな(まったくあきれたものだ)」と思いつつ明尊は三井寺に着く。帰りはその逆であり、賀茂川を越えて京に入ると無言のうちに二人ずつ立ち止まつては消えていく。高陽院の前に帰って来たときには出たときと同じで致経と下衆の男一人であつた。明尊が不安がったり驚嘆したりしたことを宇治殿に報告したが、殿は何も言われなかった。

この話の主題は何といつてもかねてうちあわせたかのように郎等たちの集合・離散が無言のうちに行われたという驚きと気味悪さであろう。つまり、完全武装の郎等を暗夜無言のうちに駆使する致経のすぐれた「兵ぶり」と一糸乱れず動く集団への感嘆と恐怖である。この平致経を通じて平安京の闇社会の一部分を下に述べてみたい。

平致経は桓武平氏の始祖である高望王から数えて四代目。伊勢国に住む「兵」であつた。致経の父は致頼。平将門を成敗した平貞盛の子である維衡と伊勢国の所領をめぐって激しい争いをしたことで有名である。「兵」の間にあつては、こうした所領争いでの敗北は場合によっては「族滅」(一族が残らず滅びること)を意味した。だから、そうたやすくは妥協する訳にはいかなかった。この時代の「兵」はこの激しい戦いに何としても勝利するため、また所領を増やす上で

有利となる権威づけのため、あらゆる手づるを頼って京で官位・官職を求めた。また豪華な進物をするなどして権力を持つ人々とのつながりを求めた。その甲斐あつてか平維衡は従四位上までのぼり陸奥守や下野守など八カ国の受領に任じられている。平致経は従五位下、右衛門尉にまで至った。最下位とはいえ五位以上は貴族として扱われるので、彼らの努力は報いられたといえようか。

平致経の子である致経が関わった事件は治安元年(一〇二二)に発生している。事件は次のような経過をたどって展開した。

この年、左衛門尉致経と弟内匠允公親きみちかが前年に東宮史生(皇太子のため役所の下級役人)安行を殺害していた事実が明らかになった。そこで五月一日に検非違使たちが伊勢国に兩名を捕えるために下向する。検非違使らは伊勢において致経の郎等逮捕に成功。以前の犯罪を追求したところ驚くべき自白を得た。

工匠允公親の仰せによりて、先年一条と堀川の橋上において滝口信乃介といふ人を殺害す。また致経の仰せによりて東宮の史生安行を殺害す。兼ねてまた東宮亮すけのり惟憲これのり朝臣あそんを殺害せんがために三ヶ夜伺ひ求むと雖も、その便なきによりて遂げずして帰り去りわんぬ。これ宮の下部等しもべ(東宮の下部役人たち)、亮(亮は次官のこと)の仰せによりて致経が宅を切り亡ぼす(致経の家を徹底的にこわした)の所為によりてと云々。(源経頼の日記「左

経記 治安元年(一〇二二)六月三日の条

郎等は史生安行のただけではなく滝口信濃介という人物を殺害し、さらに東宮亮藤原惟憲の暗殺も計画して三日三晩機会をうかがったが、たまたま機会がなく未遂に終わったことを白状している。史生安行が殺害されたところは現在の一条戻り橋の上であり、暗殺の「名所」として当時でも噂された。また藤原惟憲は後一条天皇の乳母の父であり、参議にはならなかったが正三位にもなった上級貴族であり、貪欲な受領として知られた人物であつた。自白によれば惟憲の件は東宮亮が致経宅を「切り亡ぼ」したことに原因があつたらしい。これについて一年前の「左経記」に該当する記事がある。

左衛門尉平致経、年来(一〇二二)数年間東宮町に寄宿す。しかるに昨日夫うぶを出すべきの由、彼の宮の下部来たり催す(昨日、町の住人の負担である東宮

での課役に出るように東宮の下部が来て催促した。しかるに下部を陵おかして夫を出さずしてへり(催促に来た下部ひとりに乱暴をはたらき夫役に出ないといつた)。(源経頼の日記「左経記」寛仁四年(一〇二〇)二月十四日の条

このため怒つた下部たちが数十人で押しかけ致経の家を破壊したということである。東宮町は高陽院の西にあつた東宮房(皇太子の世話をする役所)の厨町(公務員宿舎)である。厨町は各官庁毎にあり、官有地であるから、そこに住む者は官庁の課役に従事する義務があつた。

だから道理は下部の側にあつたし彼らの怒りも正しい。ただ彼らは相手を見誤つた。致経はただのネズミではなかつたのである。事件の全貌を把握した検非違使の探索はいよいよ厳しくなり、その過程で尾張にあつた致経とその従者たちの宅がすべて焼き尽くされている。探索側が火を放つたのか、致経側がそうしたかは不明である。致経等の宅の焼亡に際して土地の古老たちは「不善のこと、かくのごとし(良からぬことは、このようになるのだ)」と快哉を叫んだらしい。彼らが致経等にさんざん苦しめられてきたばかりではなく、これらの宅が無法にも郡の役所を破壊して同じ場所に新造したものだったからである。

こうした探索でも致経・公憲兄弟をなかなか捕まえない。そのため二人を捕えた者には恩賞を与えるとの官符が七道諸国に下された。全国指名手配となつたのである。

検非違使が動き出してから三ヶ月あまり後の八月二四日、致経は比叡山の横川にいた法師静覚のもとに匿かくまわれていたのを逮捕された。ところが、本当に捕えたのは伊勢国で致経・致経親子と所領争いをしてきた平維衡の息子である正輔だ、という風説が流れた。その後、致経への処分がどうなつたかを伝える史料はない。ただ冒頭に書いた「紺瑠璃壺」について一〇月一日付の文書に「前左衛門尉」と致経の肩書きが書かれているので解官(解雇)されたのは確かである。また、致経の子孫は後に伊勢国から消え

たが、維衡の子孫は伊勢平氏として発展し正盛・忠盛を経て平清盛にまで至る。このように書いてくると致経が暗殺・傷害の常習犯であるのに対して維衡が良「兵」のように感じてしまふが、それはとんでもない誤解である。「兵」全体が闇の部分を持つていたのである。

たとえば、維衡とその従者たちの動きに注目すると記録に出てくるだけで寛仁二年(一〇一八)、寛仁四年(一〇二〇)の二回も京の近辺で闘乱・傷害事件を起こしている。寛仁二年の事件では闘乱の相手となつたのは和泉式部の夫でもあり武勇の誉れ高く「兵にも劣らず心太く、手引き、強力」な藤原保昌であつた。ついでに言えば保昌の弟は真正正銘の大盗賊藤原保輔である。「アブナイ者」どうしの大喧嘩だったのである。他の「兵」に目を転じれば藤原実資の日記によれば致経の父致頼は藤原伊周・隆家の兄弟から命じられて二人の政敵藤原道長を殺害せんとしたという。さらに以前この欄で述べた清少納言の兄清原致信の殺害は源頼親の命令をうけた彼の従者によるものであつたらしい。白昼しかも天皇の行幸によつて警備が手薄になつたときを狙つた計画的なものである。「頼親殺人の名人なり。度々この事あり」と噂されただけのことではある。

これらの「兵」、つまり武士の誕生のころの彼らの姿を残された史料で見えていくと「行政機関がゆるみ治安が乱れて民間に自衛のための武力が生まれ、やがて治安を守るうとした人々が武士となつた」

という見方とは逆に「兵」自身が「治安」を乱し住民を不安がらせるものではなかったのか、と思える。殺人や闘乱を日常茶飯事とするこれらの「兵」たちは「強きをくじ弱きを助ける」ドラマの主人公でもなければ叙事詩の英雄でもない。反社会的で矮小な存在でしかなかったのである。黒ずくめの姿で無言のまま闇の中から現われ、整然と組織だった動きをし、目的を果たすと闇の中に消えていく。十分な戦闘能力を持つことにおいては頼もしく思うものの京の人々には何となく薄気味悪く思えたのではないだろうか。「魂 太く思量 ありて賢き」こと、すなわち胆力・勇氣と分別・判断力の優れていることには讃歎しながらも「あやしき者の心ばへなり」と不安な気持ちを「今昔物語」の語り手はしばしば述べている。当時の知識人の一般的な気持ちであつたらう。

さて、少し脇道にそれたが、致経の事件の経過は以上である。その経過の中から気になる点はいくつかあるが、ここでは平安京の住人にとって重要な問題である住居のことについて触れておきたい。

致経は東宮町の一角に宅を設けて京における活動の足場としていた。居住は「年来」におよぶ。東宮町は「諸司 厨町」と総称される官衙町、すなわち現代の公務員宿舎である。当然、住人は当該下級役人（東宮町では東宮関係の役人）である。左衛門尉とはいえ東宮とは関係のない致経には居住する資格はない。致経は「寄宿」とあるので縁故を頼って居住していたのだろう。

十世紀後半、平安京の姿は大きく変わる。ある人は飢饉に追われ、ある人はより大きな富を求め、またある人は自分の権威をより高めんがために京に向かつて移動・集住していくという現象は官衙町にも波及していた。例えば「兵」の一人である源頼光はもとの帯刀町に住んでいる。頼光の前の住人は藤原倫寧。「蜻蛉日記」の作者の父である。全般的な官衙の縮小・停廃傾向の中で官衙町の一つである「帯刀町」が廃絶し、そこに倫寧の邸宅が建ち、やがて頼光に購入されたのである。東宮町も官衙町の性格を残しつつ致経のような人間の寄住も容認する町へと変わっていったのだろう。ただし、衰退したとはいえ官衙町ではあるので、その住人は先に書いたようにそれぞれの官衙が課する役に従事する義務があつた。これを拒否すれば居住権を否定され追いつ出される。致経はとて模範的な町の住人とはいえず、東宮房の下部たちとトラブルを起こしていたことはすでに述べたとおりである。致経のこうした居住のあり方は摂津源氏の祖である源頼光とは雲泥の差がある。数力国の受領を歴任し財を貯え一町屋（二二〇メートル四方の邸宅。当時の価格は米四千石、つまり米二四〇トンといわれる）の一条邸を購入し、さらに道長にもたびたび多大な進物をし「武士」として最初に昇殿を許された源頼光。受領になることなく終わった致経には手の届かぬ世界のことであつた。このついでに述べれば、平安時代も中頃となると一国の経営は税率の決定までも

が受領の裁量となり、中央には一定の官物（租庸調などの租税）を収めればよかつた。つまり、任国の民を絞れば絞るほど受領の富は増えたのである。そのため受領の貪欲さは「受領は倒るる所に土をつかめ」という言葉の通りであり、人民の窮乏は大変なものだつた。たとえば、先ほど述べた平維衡は常陸国の受領をしている間に人民に対して無道な収奪を繰り返し、彼の後任であつた藤原信通の報告によれば前任維衡が去つたあとと人民の逃亡と飢餓により常陸国内（ほぼ今の茨城県全体の面積に匹敵する）で耕作されている水田はわずかに三百町（一町はほぼ一ヘクタール）であり「国いよいよ亡弊」という状態となつていた。

受領だけでなく致経のような在地の領主の非道な収奪ぶりもひどかつた。十世紀末の在地にあつて国衙の一部の勢力と結び、自らの勢力を暴力的に広げていくさまは土地の人々にとって迷惑千万なものであつたに違いない。頼通の時代、永承五年（一〇五〇）に和泉国司が訴えた内容を少し紹介したい。

五位以下の諸司官人以上、多くもつて部内に来たり住み、……伴類・眷属ら悪事をなす。或いは諸家の莊園を立て寄せ、国務に對捍（命令に従わず逆らうこと）し、或いは平民の田畠を押し奪ひ、私領を構えなす。かくのごとき類、あげて計ふべからず。およそ暴悪不善の輩、国内に住するの間、強盜・窃盜、放火・殺害連綿として絶えず。大いに騷擾たり。

致経の宅が焼亡したとき土地の古老が「不善のこと、かくのごとし」快哉したのも無理はなかつたのである。こうした致経のような「兵」が十一世紀前後の京には多くいたはずである。貴族の邸宅を襲う盗賊は言うまでもなく闇社会の住人だつたが、守る側にいた「兵」たちも頼まれれば暗殺も辞さない闇社会の住人だつたのである。平安京に住む人々の不安は尽きることはなく、貴族たちも「これはただ王法（君主の決めたきまりのこと）の澆薄（人情が薄いこと）なり。ああ悲しいかな。」と嘆きの言葉を日記に書き続けた。「いつの世も同じ」とは老人の繰り言だが、「そうだね」とうなずいてしまふようなのが悲しい。

最後に以下はまったくの付け足しだが、伊勢国をめぐる平維衡との抗争に敗れた致経の子孫のことについて若干ふれたい。彼の子孫の一部は「族滅（一族を残らず滅ぼすこと）」を逃れて伊勢湾を東に向かい知多半島の先端部に勢力を広げ長田氏と名のつた。そして、致経から一世紀後に長田氏の一人がつかの間の脚光を浴びる。尾張国住人野間内海、莊司長田忠致である。義朝の「相伝の家人（古くからの家来）」であつた長田忠致は平治の乱に敗れて彼らを頼つてきた源義朝を湯屋で謀殺した。しかし「相伝の主」の殺害は彼らにとっては予想外の結果となる。平氏から与えられた恩賞は老岐守となることのみ。「せめて美濃と尾張の国を」願つ

たがかなえられなかった。俗説では平氏が滅んだ後、源頼朝から「美濃と尾張が欲しかったのだな。よしやろう」と言われて喜んだ忠致父子が与えられたのは「逆磔」。これこそ「身の終わり（美濃尾張）」だね、と世間ではもてはやされたとか。ただし、史実ではそれとは異なり長田忠致とその子は治承四年（一一八〇）に源頼朝とは別に反平氏で行動した甲斐の武田信義らと戦い敗れて梟首されたらしい。致頼・致経以来の一族の暗い歴史にふさわしい惨めな滅亡をとげたといえる。

【補足】

◇王朝時代（十世紀～十一世紀）での武士の成立について

平安時代の武士の性格とその成立についてここで詳しく述べる知識も能力も筆者にはないが、理解している限りで大まかに述べておく。

古代貴族による近畿の政権が衰退、または崩壊して関東が日本の中心地となっていく。平安時代から鎌倉時代への変化をこうとらえることは私たちの常識となっている。東国（関東）の武士は西欧のゲルマンの戦士で、京都の貴族の政権はローマ帝国と見立てて、鎌倉に武士政権である鎌倉幕府が開かれたことを中世の時代への幕開けとする見方は現在ほぼ通説といっている。いや、東国の武士ではなく中世はもつと北の東北から生まれたとする説もある。

確かに東北地方は砂金が算出されるだけでなく、駿馬の供給地であり、アザラシの皮や鷲羽など、武器武具の材料の供給地として武士にとつてはノドから手が出るほど欲しい地であった。しかし、平将門の乱、前九年の役、後三年の役といった例を出すまでもな

く、十～十一世紀の関東・奥羽地方で活躍したのは京都から下ってきた源氏・平家・藤原氏の流れにたつた武者たちであり、最終的な勝利者である奥州平泉の藤原氏は京都と太いパイプを持ち続けている。この点からすると、自ら開拓した土地を経営していた自宮領主であった武士を糾合し、一国規模に匹敵する範囲を支配するほどの武士の集団をつつていく上で平安京の王家・貴族の存在を無視できないという説が出てくることは容易に理解できよう。この説に従えば中世は農村から自衛のために生まれ出た武士たちが荘園領主たる都市貴族を打倒して成立したのではなく、荘園領主である都市貴族と在地の領主である武士という二つの支配階級の内部での権力交替ということとなる。

また、最近の研究に一言ふれると以下の通りである。九～十世紀の頃、蝦夷の反乱や外寇に対処するために東国や鎮西に中央から下つていき、在地の勢力と血の交流を図りながら、その地に住み留まり土着していった。十二世紀末の鎌倉幕府成立以後、東国の武士たちが地頭などに補任され西国に活動の場を広げたのはその第一の波といえるかもしれない。また、受領やその郎党、あるいは荘園の沙汰人（現地で管理・経営をする人）として各地に下つた都の武士が地方の豪族のもとに婿入りした例は数えきれないほどであろう。逆に在京中に都の人と縁を結んだ地方武士も多くいたはずである。従来の成立期（九世紀から十二世紀）の武士に対する認識、つまり、武士を在地領主として土地に縛り付けられた存在とする認識は、この点で少し甘かったといえる。成立期の武士は地方の自分の所領に頑なに執着していたわけではな

く、また京都の貴族社会に反発するわけでもなかった。むしろ文武兼ね備えていた武士たちは京都の地での活動で各地の武士の同輩との間に強力なネットワークを築き、全国の情報を得るにより自分たちの活動の空間を広げていったのである。

◇藤原保昌について

藤原保昌は和泉式部の夫として有名であるが、「武士」としても有名であった。たとえば説話集の「十訓抄」では源頼信（源頼朝につながる河内源氏の祖）、平維衡、平致頼とならんで「武者」として保昌の名があり、南北朝時代に成立した系図集「尊卑分脈」には「勇士武略の長」と記されている。中世の人々は保昌を武士として認めていたのである。

さて、「今昔物語」巻二十九第二十六に「日向守□□□、書生を殺す語」というこんな話のせられている。

日向守何某（なむがし）という者がいた。

任期が終わって新任の国司が下つて来るまでに引継ぎの書類を作らねばならないので、書生の中で最も能力の高い者を部屋に閉じ込め古い記録を都合良く書き直させた。書き終わると守は懇ろに札を言つて褒美も与えた。だが、書生が退出しようとするのと守の郎等に捕えられる。そして郎等が守の命令で書生を殺すことになっていることを聞く。書生は最後の願いとして老母と子供に会うことを願い、郎等に伴われて家に行き母に事情を話し最後の別れをする。これを見聞きした郎等も涙を流したが、やがて書生を栗林の中へ連れ込み射殺し首を取って帰った。文書の偽造だけでも重罪な

のに、それ書かされた罪もない書生を殺すとは罪深いことだ。これは重い盗犯と同じ大罪だと、聞く人はみな寺を憎んだ。書生とは在地の有力者から採用された者で、受領は国衙におかれた「所」と呼ばれた各分課に、このような現地の有力者と都から引き連れてきた子弟・郎等を配属して国内行政にあたらせていた。この話の日向守は名前が欠字になっていて誰なのかわからない。しかし、さまざまな史料を付き合わせていくと、この日向守は藤原保昌としてまず間違いないだろう。

ただ大急ぎで言葉を補えば、公地公民の制度は摂関時代になると崩壊しており、地方の支配は国守の請負となっていた。一定の物資を中央政府に納入すれば、あとは好きなように私財を蓄えられた。行政官というよりも徴税吏・収奪者としての性格が濃くなっていたのである。そのため国守の官職は利権化し、任国に赴任して前任の国守からその利権を受け取るという意味で、この時代の国守は「受領」と呼ばれるようになる。だから律令的な地方支配が崩壊してもこうした社会システムによって都の貴族たちは栄華を極められたといえる。そういった地方支配のあり方の中でも保昌のしたことは「今昔物語」の記述されるほどに目立つものだったのである。

藤原保昌の出自は藤原南家黒麻呂流で将門追討使の候補にもなった藤原元方の孫である。兄の斉明は大江山を襲つて後に海賊となり近江国で討たれている。弟の保輔は「強盗の張本、本朝第一の武略、追討の旨を蒙ること十五度」という人物であり、永延二年（九八八）に捕えられた際に切腹したが死にきれず、腸を引きだしたまま投獄されて死亡したとされる。

また、保昌の姉妹は源満仲の妻となっており河内源氏の祖である頼信等を産んでいる。「兵の家」は武芸という職能を維持するために相互に姻戚関係を結んで、その社会的地位を維持していたのである。こうした点からみると保昌の頃になると黒麻呂流藤原氏は「兵の家」への道を明確にしていたといえる。

藤原保昌で見落とすことのできないのは、藤原道長や当時の女流文学者との関係である。保昌は歌人としても知られた存在であり都会的なセンスもあつたらしく、藤原道長の最愛の家司となり「一子のごとく」重用された。和泉式部の夫になったことはすでに書いたが、紫式部からもずいぶん頼りにされていたらしいという説もある。野蛮と暴力だけでみようとすると、この時代の「都の武者」の真の姿はつかみ損ねるようである。

話が横にそれるが和泉式部の先夫である橘道貞も陸奥守となつた軍事貴族であつた。また、清少納言の夫である橘則光も陸奥守となつている。これら女流文学者の夫だつた貴族が武者としての風貌を持ち、しかも砂金はもとより武芸業者としての必需品である駿馬をはじめ莫大な富を手に入れられる陸奥守に任じられたのは偶然といえない気がする。藤原保昌も名だたる武士であり、武門の源氏とも姻戚関係があり諸国の受領や大宰少式などを歴任して莫大な富を蓄えていた。有名な紫式部の従姉には平維将の娘がいて、式部とかなり親密な関係であつたらしい。軍事貴族、「都の武士」と女流文学者の浅からぬ関係。

王朝文学の優雅なイメージとはまったく違うしたたかな計算が彼女たちにあつたかもしれない。

我がおくのほそ道の旅(5)

成瀬 和之

大自然の美景を数えきれないほど見てきたが、今また象潟(今は清音で「きさかた」。秋田県にかほ市)に、はやる心を抑えきれない。酒田の港から東北の方角へ、山を越え、海辺を伝い、砂丘をたどって、その距離およそ四十キロ、陽がやや西に傾くこの象潟の村に着いた。

(中略)

象潟の入り江の広さは縦・横それぞれ四キロほどで、その面影は松島に似ているようで、また違つたところもある。松島は笑顔の美人のように明るいが、象潟は耐え忍んでいるような沈んだ印象を与える。寂しさの上に悲しみをたたえて、象潟は、心悩ませる美女を思わせた。

象潟や雨に西施がねぶの花

象潟の雨の煙るかに、ねぶの花咲いている
それは、古代中国の美女西施の、愛いに沈んで半ば目を閉じと春情魚い起させよ。

(後略)

「おくのほそ道」(全角川ソフィア文庫ビギナーズ・クラシックス日本の古典)

象潟は秋田県南部に位置し、太平洋の松島に対する日本海の名勝でした。「おくのほそ道」最北の地。本文に「松島は笑うが如く、象潟は憾むがごとし」とあります。百十五年後の一八〇四年の象潟地震で海底が隆起し、今は陸地化しています。それは芭蕉も曾良も知らないことで

す。西施とは春秋戦国時代に越王・勾踐が呉王・夫差に復讐のため贈つた伝説の美女である。国を滅ぼすほどの美女の名が象潟と艶やかなネムの花と並ぶ。「象潟」は現実、雨に濡れる合歡の花に西施の面影を重ねた「雨に西施がねぶの花」は心の世界ですから「古池无生」の句です。

車で行くと、象潟には日本全国でも屈指の「道の駅」があります。夕方に着きました。背中に、海面から直にそびえたつ独立峰の鳥海山(出羽富士、秋田富士、庄内富士とも呼ばれる)を感じながら、日本海に沈みゆく夕日を眺めるとき、この世のものとも思われない感覚に襲われました。玉手箱をお土産に持つて帰れば白髪のおじいさんになっているのでは？(既にもうお爺さんか?)という錯覚に陥りました。いずれにしても、象潟は「我がおくのほそ道の旅」でナンバーワンのビュースポットであつたことに違いはありません。芭蕉は雨の象潟に出会いました。私は夕日の象潟に出くわすことが出来ました。自動車で泊まりながら行くと、ビュースポットのタイミングを選択できるといふメリットがあります。写真好きで車好きの友人のお陰です。もつとも、その友人には、私から見ると少しの雲でも気に入らなかつたのです。が……。

参考図書：NHKテキスト「おくのほそ道」(長谷川耀)

米国紀行(5)

河原林 成行

5. ネディーン 結婚式

今回は、本旅行の目的であり、ハイライトであるネディーンとジョンとの結婚式及び披露宴について書きます。

この旅行は数少ない外国の友人の結婚式出席であり、貴重な体験でもありますが、忘れないうちに何かの形でまとめておこうとは思っていました。ついつい伸び伸びになっていました。貴方の「どんなんや」つたか教えて「や」の一言で書き始めた処、いい備忘録になりそう。で、「どのようにまとめようか」と楽しみながら書いています。また、編集・送信が簡単なインターネットのお陰でもあります。貴方の知りたい米国旅行とは違つて、我々のは清纯無垢なもので、ご期待(?)を裏切つて申し訳けないですが、乗りかかった舟。最後までお付き合い下さい。

お代はこの前も言いましたように、チョット高く付きますが「飲み代」で結構です。五月三日(土)、雨のち曇りのち雨。

ネディーン(二十七才)とジョン(三十才)の結婚式当日です。結婚式は午後二時から三時で、披露宴は四時からです。旅の疲れがようやく出て来たのと昨日のワシントンDCへの日帰り見物もあつて、二人とも午前中は爆睡です。いや、一旦は八時頃に起きたのです。

日本では五月三日の夜の九時頃のハズです。今日は苗代作りの仕上げの「粃(米の種)撒き」の日なのです。私のウチは、

六反(六〇アール)ほど農業をやっています。日曜農家(Sunday Farmer?)なのです。今は、一年でも最も大事な、苗代作りの仕上げの「籾撒き」の時期なのです。招待状を受け取った時に我々が躊躇した理由の一つは、これがあつたからなのです。

また、この旅行はプライベートとは言え、日米の交流プログラムである「日本・マサチューセッツ工科大学交流プログラム」(Japan-MIT program)の一環で来ていたネディーンには会長、社長、専務に公私にわたりお世話になっていました。滅多に手に入らない祇園祭りのパレードの観覧席の特等席券をもらつたり、食事に連れていってもらつたり…、その他宿舎の選択など種々の優遇処置が与えられています。

科学技術の分野で世界でもトップの大学から日本への留学生を当社が預かるのですからね、責任が重大なわけですが、色んな意味で、日本からこの大学へ留学して日本の政府行政機関や基幹産業等の中枢部へ入っている人は山ほどいるのですが…。ネディーンとの結婚が決まり、その招待状が届いたことは報告してあります。社長も専務も喜んでくれ、私が行くのか行かないのか気になるところです。「お祝い」の都合もあるのです。この時点では彼らには、「行ける割合は、六：四です」と伝えてあります。

ドイツにある子会社の元社長も、「約一〇年ドイツにいて、葬式には五回ほど出たが、結婚式は一度も出たことがない」と言うくらいのもので、彼は、「是非、出

席したらどうですか」と言っていました。また、私の叔父さんや母、それに弟や子供たちも「大丈夫。行つといで」と言ってくれたので、行けることになりました。それでも、農家にとつては、年に一度の大仕事なのです。

「行こう」、「ヤッパリ止めとこう」を何度も繰り返して、毎日、答が変わります。「とりあえずパスポートだけは取つておこう」と海外渡航センターで手続きをしますが、「多分、行けへんやろな。」というのが正直な気持ちでした。

そんな迷いに終止符を打ち、「GO!」の決断をさせたのは、母の「あんたらがおらへん方が子供も自覚してシツカリするわ」の一言(可愛い親には旅をさせる?)とネディーンの「どうしても来て欲しい」の一言、それに子供の「大丈夫の一言(全部で三言?)」の三拍子が揃つて、一応外的要因が消去されたからだったのです。

中でも、今までズツと両親、特に母親とくつついており、一人で寝たことのない末っ子・亮介(七才、小二)までもが、「大丈夫」と言ってくれたのには驚きました。そのようなことがフツと二人の頭をよぎり、「籾撒きうまく行つたやろか?」、「みんな大丈夫やろか?」と思いは日本に飛びます。今まではアメリカに来ることで精一杯だったのが、少し余裕も出て来たのでしょうか?

電話もしたいのですが、もし亮介が電話口に出たら「お互い、里心がついて大変だ」ということで、「また、彼のいない

時間帯にしよう」ということにしました。帰国してから聞くと、子供たちは大変頑張り、常にはそんなことは絶対しない娘・雅代までが、田んぼに入り、奮闘してくれたとのことでした。

また、問題の彼は、帰つて顔を合わすなり、「もう顔を忘れるとこやつたわ」と嬉しそうに憎まれ口をたたきます。「でもムツチャ危なかつたわ。今日が限界やつたわ。」と言うのを聞くと思わず抱きしめてしまいました。その夜は「川の字」で寝ました。

これを書いている今も、彼は一日に何度呼ぶか分からない大好きなオカアサンと風呂に入ってハシヤイでいます。子供にも大きな借りができてしまいました。

そんなこんなでふと里心の付いた二人ですが、外を見るとドシャ降りです。昨日までは見事な五月晴れだったのにウソのようです。「ネディーンは雨女やな」と言いなながらも、午後二時からの式ですので、昼までユックリ寝ることにしたのです。

処が、インソップの「ウサギとカメ」の話じゃないですが、それがいけなかつたのです。寝過こしてしまつたようです。ホテルには日本のように目覚し時計もなく、目が覚めたら十二時半です。大急ぎで準備し、外へ飛び出します。ネディーンによると「服装は、男性はダークスーツ、女性は適当なものでよく、特に、礼服の必要はない」ということなのでその通りにしました。どうやら雨も上がったようです。

結婚式会場となる教会へはネディーンの手書きの地図しかありません。それ

もどうやら自動車用に書かれたものらしく、「右へ一マイル行って左へ曲がり、三マイル行った五ツ目の信号を左へ曲がる」とか書かれています。実際に、地図に従つて少し歩き出したのですが、地図の場所と現実の場所とが全く一致しません。時間もないので、ホテルへ戻りタクシーを呼んでもらいました。この頃には、受付嬢ともすつかり顔なじみです。

やつとホテルを出発したのが十三時十五分、教会へ着いたのが十三時三〇分でした。とてもじゃないが歩いて行けるような所ではありませんでした。タクシード代とチップで、二ドル十一ドルです。小さいが百年の伝統を持つ教会へ着くと、まだ誰も来ていません。この辺りはボルチモアの郊外と言っただけあって、緑に囲まれた林の中を道路が通り、道路沿いにポツポツと一戸建てのさほど大きくない家が建つており、交通量も少なく、とても閑静な所です。

そこらの写真を撮っていると、近くに窓の看板が目に入りましたので、少し腹こしらえをしておこうと思つて入りました。そこは、少々薄暗くチョット変わった喫茶店でした。コーヒーの種類やブラック、ミルク入りなどに分けられたポットが置いてあり、自由に飲めるのです。あまり時間が無いのでスグ出なければなりませんでしたが、なんと一面にマージャン室があり、女性四人が興じていました。

急いで教会へ戻ると、今度は大勢の人が集まり、着席しています。我々は、日本でも教会での結婚式に出

席したことがありません。教会の真ん中に通路があり、その左右に席があります。近くの人に、新郎側と新婦側があり、間違っではないけないものかもしれないと思い、

「新郎、新婦側で席が分かれているのですか？」とか、「カメラはOKですか？」等と確認をし、後ろから二列目に座りました。ここでは我々のような一般客はどちら側でもよく、またカメラもOKということでした。

その時、遅れて来たおバアちゃんが、妻の隣のチツチャな女の子に相手になっています。妻がきつと「女の子のおバアちゃんだろう」と思い、「我々の席を代わってあげよう」と云うと、そのおバアちゃんはとても喜んで、何度も礼を言っていました。

いよいよ式の始まりです。先ず、ジョンと母親、兄達が入場します。続いて、ネディーンの友人、姉が揃いのピンクのロングドレスで花束を持って入場します。最後に、純白の結婚式ドレス姿のネディーンが父親と腕を組んで入場します。二人とも顔を上げ、とても幸せと満足に満ちた表情で祭壇へ進みます。母親は、最前列に兄と一緒にいます。

でっぷりと太った神父さんの、厳肅な中にもユーモアを交えた進行で進められます。後ろの席なのでよく分かりませんでした。神に誓いをしていたので、女性によって讚美歌が歌われます。とても綺麗な声でした。

途中でジョンは感激して涙が止まらな

くなります。その涙を拭くネディーンもつられてもらい泣きです。ジョンは男ばかりの六人兄弟の末っ子で、幼くして父親を亡くし、女手一つで育てられたそうです。

一通り式が終了して退場する時には、花嫁は父親と違つて、花婿と腕を組んで退場しました。何だか我々の青春時代のダスティ・ホフマン主演の映画「卒業」のシーンが思い出されました。現実には体験できるとは思つてもみませんでした。花嫁が無事によかつたネ、ミスター・ジョン！？

式が終わわり、みんなについて外へ出ると、雨は降つてないので危ない空模様です。しばし外の空気を吸つていると、話しかけてくる人がいます。妻に話しかけてきたのですが、妻がヘルプしてきたのです。教会で席を譲つた先程のおバアちゃんです。

もちろん初対面ですが、先程の一件以来、妻を大変気に入つてくれて話かけてくれたのです。小柄でとても上品な女性です。「何処から来たの？」「子供はどうしているの？」とか、この教会の由来や百年の歴史、自分やネディーンもここで結婚していること、また、自分もここで結婚式を挙げたことなどを色々しゃべつてくれます。終いには、手に持っている孫の絵本を三冊見せて、プレゼントすると

言つてくれます。

京都は知りませんでした。千年の都と知つていて都市は東京だけだそうです。日本II東京なのです。この年代のアメリカ人の多くは、これに近くても遠からず

だそうです。まだまだ極東のチツポケな国なのでしょう。

分かり易い英語でユックリしゃべつてくれるので、何とかついていけます。妻のために、生まれて初めての「同時通訳」です。誰か上手な人がいるとその人に頼つてしまうのですが、「自分しかない」という状況になると聞き直つて度胸も付き、何とかなるものです。この辺りから何故か妻のしゃべる日本語が京都弁から標準語になります。

そのうち、彼女の主人もやつて来て、紹介してくれます。彼らはネディーンの姉の夫の両親だったので、レフコビッツ夫妻です。チョット覚えにくい名前です。日本から来たこと、ネディーンとの関係などを話しているうちに気持ちに通じ合い、「披露宴会場へは我々が送つていく」と言つてくれましたので、甘んじることにしました。

ネディーンも我々が誰に乘せてもらうか気を遣つてくれていて、最初は、マツダのヨリザネさんに乗せてもらう手はずでしたが、急遽変更です。

ネディーンが高校時代にホームステイさせてもらつていた広島島の松浦夫妻とも挨拶できました。こちらで不安な思いをしていたが日本人に会えてホツとしたそうです。

すぐに「ご主人が車をまわしてくれ、七キロほど離れた披露宴会場へ向かいまして。彼の車はマツダ車で、乗ると同時にシートベルト着用装置が働いて、自動的にシートベルトを着用するようなものでした。日本ではまだ見たことがありません。

ほとんど車と出会うことなく、新緑の林の中の住宅街を通つて、十五分ほどで披露宴会場へ着きました。会場は周りの新緑に非常にうまく調和した、緑色の透明な総ガラス張りの大きな建物でした。

披露宴は地下一階の大広間で行われるのですが、始まるまで広い階段や踊り場を利用して立食パーティです。テーブルには千代紙で折られたとても多くの折鶴が置いてあります。会場の各テーブルにも同じように折鶴が置かれているのですが、全部で五百羽ほどですが、すべてネディーンが折つたとのこと。中には「これは何ですか？」と聞く人もいました。

やがてネディーンとジョンやネディーンの姉さんや友人もやつて来て、立食パーティも盛り上がりつてきました。ネディーンの姉さんや友人は「日本語バージョンのセサミストリート」を見ているんだそうです。

また、今回日本から招待された四組の日本人も、「同類相寄る」ということで、お互い「ホツとしますネ」と言いながら、瑞々しい新緑をバックにネディーンとの関係やエピソードや「どうやつてここまで来たか」を話したり、記念写真を撮つたりしていました。

披露宴は定刻の四時に始まりました。会場入り口にネディーンとジョン、その親が立礼して迎え入れてくれます。我々が挨拶して通る時にネディーンが、「この人がカワラバヤシさんよ」と両親に紹介してくれました。

ご両親は少々改まって、「娘からお話し

は聞いています。本当にお世話になり、感謝しています。」「今回は遠い所まで来て頂き光栄です。」と丁寧な礼を言ってくれました。

特に、父親が心から喜んでくれているのがよく分かりました。こちらでも改めてお祝いと招待してくれた礼を言っ中へ入りました。

披露宴の司会・進行役は父親です。まず、両家の親・兄弟の簡単な紹介です。ジョンの元気なオバアチャンも紹介され、ハシヤいできます。次に、「日本からの遠来の客」として我々四組が順に紹介され、立って礼のみで挨拶します。日本人組は同じテーブルです。

新郎・新婦のテーブルの後ろには障子を思わせる衝立てと大きな折鶴があります。ネディーンの設計と思われる国、全体的に、ネディーンカラーが出ています。いや、そんなこととは関係なく、ネディーンが強い(ジョンが弱い)だけなのかも知れません。そんな気がします。「危うし、ジョンの運命やいかに……」なのです。

そうこうするうちに、宴も盛り上がり、いよいよダンスタイムです。音響効果も抜群で、我々にも馴染みのスタンダード曲が流され、新郎・新婦や両親を中心に踊りまわります。DISCO会場顔負けです。我々も促され、その度にだけチョット顔を出します。ネディーンと父親がもつともノツていました。父親がお転婆な娘を結婚させる心境がよく分かります。この調子で、飲み物、食べ物が無くな

っても夜十時頃まで続きます。とにかくタフです。アメリカンパワーです。

みんなも一人抜け、二人抜けしてお開きとなる頃、例のレフコビッツ夫妻が、「帰りましょうか?」と言って迎えに来てくれました。みんなボツボツ帰る中を待つていてくれたのです。我々を常宿の「ザ・コンフォート・イン」まで送ってくれるのです。

外は雨でした。ご主人の方が雨の中を駐車場まで車を取りに行つて、玄関まで寄せてくれました。初対面なのに、親切にしてくれます。異国であるだけに、余計身にしみます。

彼に、「本当に親切有難う」と言つと、「これは私の楽しみで、喜んでやつていくのですよ」と言ってくれます。

さらに、運転しながら「明日はどうするのか?」と聞くので、「ニューヨークへ行く予定です。」と言つと、「ボルチモア・ワシントン国際空港の発着時間?」と聞きます。「十時四〇分発のUS航空です」と答えると、「明日の朝、八時三〇分にホテルへ迎えに行き、ボルチモア・ワシントン国際空港まで送っていく」と言ってくれます。

「ボルチモア・ワシントン国際空港は大きな空港で、搭乗口などをよく間違えるし、早めに行つた方がよいので見送りに行く」と言ってくれます。

我々も、せっかく知合いになれたのに、ホテルで「ありがとう」と言つてこのまま別れるのもしのび難く、好意に甘えることにしました。

三條大橋と「野ざらし」

大江 雉鬼

今回は、京都府庁の前を通りがかったのを契機に江戸幕府終焉の一八六七年に思いを巡らせた旨の話を書いた。大政奉還の後、権柄奪取のクーデター(小御所會議)が行われて武力衝突(鳥羽伏見の戦い)へと展開していくのが一八六七年十月から十二月の情勢なわけだが、京都府庁がこうした思い起こしのきっかけとなったのは、急場しのぎの臨時政府的なものが現在の京都府庁がある場所に置かれたからである。そもそも京都府庁の敷地は、その由緒を辿ると京都守護職屋敷であり、松平容保が徳川慶喜に付き従つて大坂に下つた後に市中取締役所(京都町奉行を改めたもの)が置かれ、その役所が京都裁判所と名を変え、ほどなくして立ち上げられたばかりの京都府の政庁となる。江戸幕府終焉というテーマを設定すると、そのゆかりの地ということで大政奉還の行われた二条城やクーデターと舞台となった京都御所が注目されがちだが、現在の京都府庁がある場所もまた一八六七年から六八年、すなわち慶応三年から四年改め明治元年のドラマを語る上では忘れられない。

以上は京都府庁から一八六七年へ飛躍したことについての無駄口なのだが、このケースのように、とある場所に立つた時にその地と関連のある事象に思いが及ぶのは誰しも経験のあることだろう。関連の度合いが強ければ、その飛躍は普遍性を持ち、他者の共感も得やすい。その意味では、京都府庁のケースは十分にわかりやすい部類だと思う。一方、逆に関連する度合いが

低いと必然性ないしは脈絡は失われ、発想そのものが突拍子なものに聞こえてしまう。文字通り、トンデモ級の飛躍になってしまう。時によつては詩的・文学的な香りが漂うこともあるが、大概は第三者からの理解が得られないばかりか、一步間違えれば狂気の烙印さえ押されてしまう。「或る冬の夜」のこと、大阪の道頓堀を彷徨していた青年の脳裏にモーツアルトのト短調シンフォニーが鳴り響いた、という年配の方であればすぐに思い当たるエッセイだが、あれなど場所とはまるで無関係の発想が唐突に降つて沸いたケースである。

脈絡を持たず、イメージのみが生起するパターンで有名なものというと、他にもマドレーヌの香りが忘れていたはずの幼少時代を鮮明に呼び覚ますというものがあつた。ブルーストの『失われた時を求めて』である。もつとも、実をいうとこれは読んだことのない小説である。しかし作品を読んではない私でさえその部分だけは聞き知つていくくらい、超絶長編の幕開けを飾る有名なエピソードである。脈絡を失つたイメージが無秩序に連鎖する現象を仮にイメージの三段跳びと名付けておき、その代表選手の選考会を開くとすれば、『失われた時を求めて』の第一章は、先に挙げた小林秀雄のケースとともに、最初から正確マークのついた有力候補である。

これら格調高いものと比べると、京都府庁前での出来事は平板の極みだが、さらに輪をかけて平板平俗な思い起こしを一つ。それが三條大橋を渡つていく時に落語の「野ざらし」が頭をよぎつたというお話である。落語は話芸と呼ばれ、斯界の名人は人間国宝にもなるくらいだから芸術枠で

考えてもいいのだが、小林秀雄のモーツァルト云々とはかなり趣が違っている。それはさておき「野ざらし」というのは古典落語の演目で、あらずじをかいつまんでいうと、釣りを趣味としていた浪人先生がある日のこと、葦原に捨て置かれていた人骨を見つけ吊ってあげたところ、その晩になって若い女の幽霊が現れ札を云々というものである。笑いの眼目は、その女幽霊の来訪をのぞき見た隣の男がスケベ心から浪人先生の真似をした結果のドタバタにあるわけだが、話の展開の鍵となるのが釣りであって、三条大橋を渡っている時に、ふと「野ざらし」の一節が思い浮かび、釣り糸を垂れている人がいたりするんじゃないかと三条河原を覗き込んでしまったのである。

なぜ「野ざらし」だったのか、そして釣りの姿を探したのかというと、まったくもって説明不能、奇妙以外の何物でもない。地名つながりがあったわけでもなければ、釣り人の姿が最初に目に入ったわけでもない。それ以前に、鴨川の三条河原など京都府数の繁華の巷、カップルが等間隔になつて座るデートスポットであつても、釣現場なんかではない。こんな場所ですり糸を垂れる人など滅多にいない(皆無とは言わない)。上方落語の演目には三条大橋が登場するものがあるので、三条大橋から落語へというワンクッションを経たあとで、有名な古典落語である「野ざらし」へと展開したのかも知れないが、そんな説明は完全な後付けである。実際には説明不能閃きがあり、「野ざらし」がいきなり降ってきたというのが正しい。このところ、落語に興味が向いていて、DVDで見たら奇席を

覗いたりしているのは確かであり、そうしたことか伏線というか背景の一つにはなっていたのだろう。それにしても三条大橋から「野ざらし」へというのはあまりにも唐突すぎる。

こういう具合での、イメージの三段跳びを眺めてみると、決まった手順を辿っているわけではないし、人間の脳というものの不思議さを改めて感じさせてくれる。京都府庁前で江戸幕府の終焉を思つたのには、まだ説明可能な根拠もあつて必然のうちに入れることもできるが、三条大橋での「野ざらし」は確率的には無理ではないといったレベルである。紙幅の都合もあるので詳しく紹介するのは止めるが、山道を歩いていて昔の流行歌が口をついて出たこともある。日頃からよく口ずさんでいる歌ではなく、子供の頃によく聞き、よく歌つたことを覚えている程度の歌である。それが記憶の箱からこぼれ出てしまったのである。仰々しいヘッドギアか何かを装着して脳神経レベルでの記録を取つていたとすれば、自覚できる領域には達していない何かの刺激に反応してのことと分析できたのかも知れないが、同行者が怪訝な顔をして「急にどうしたの？」と尋ねてくるし、当人はハハハと照れ笑いで誤魔化すしかない、そのくらい唐突な飛躍だった。将棋や囲碁といった限られた手順の中で人間の名人を凌駕するといった程度ではない、もつと複雑に人間らしい反応をみせるAIが可能になるとすれば、こうした確率論の範疇でしか捉えられない反応をも一定レベルでパターン化した上で、その発現プログラムを正しく実装したものになるに違いない。

孫ウオツチング(17)

福田 圭

四月二十四日(月) 光ちゃんに会いに行く。生まれて十九か月目になる。

保育園に迎えに行ったが、やはり人見知りをする。

お父さんなら駆け寄って来るのに、お爺ちゃんには近寄ろうとしない。

お父さん、お母さんは特別な存在だとわかつており、ひと月に一度しか来ない「おっさん」とは区別ができていくということか。言葉は、お父さんとお母さんは「タータ」、その他、自動車は「ブーブー」、拒否をするときは「ビー」というらしい。

韓国旅行のお土産に、棒で線を描くと、カラフルな線が浮かび上がる十枚セットの黒い紙をプレゼントしたが、さつそく線をたくさんひいて面白がってくれた。これは芸術の始まりかと、「ジジ馬鹿」が頭をもたげる。ただ、曲線を描くのは難しく、直線の方が書きやすそうなどど「発達研究者」ぶつて考える。「お絵描き」の初挑戦かと思えば、どうやら、もう家の壁に落書きなど始めていたようだ。初めて見たのは「お手伝い」である。

ローラーの掃除機を持って、お絵描きで出た畳の上のごみ屑を「お掃除」して見せてくれた。色々と初めての経験を積み重ねているようだ。写真を撮ったり、そういうしているうちに、小一時間も経つと、笑顔が見られるようになり、帰り際には「ハイタッチ」で見送ってくれた。

次の日、地震で入山禁止になり、復旧したばかりの三徳山三佛寺投入堂に、オランダ人と、オーストリア人と交際交流

しながらお参りした。「日本一アプローチが難しい(?)」あの有名な国宝である。木の根をかるうじて手掛かりにして登ったり、鎖場が連続したり、さすがに険しかったが、昔取った杵柄で、四人づれのトップにしゃしゃり出て登り切った。気持ちのいい一日になった。

編集後記

五月の風は心地よい。さつきが咲き新緑がまぶしく思える。連休初めに友人に誘われ信貴山から鳴川峠まで歩き音の花温泉に浸かり玉造まで帰ってきて、鴨焼肉鍋を頂いた。この鍋は、今韓国で人気だという料理で一度食べたなら止められなくなるほどの美味さである。鶴橋界隈で韓国料理を幾度か頂いたが、その中でも絶品である。鴨料理の大発見といったところだ。

鳴川にある死の行者が大峰山へ行く前に修業したという元山十光寺はなかなかの寺構えであったが、その集落の家々の豪壮さに見とれ「何故なのか?」と好奇心を持ったので、村人を探したが誰にも出会わなかった。よほどの経済的な何かがあるのだろうか。以前、生駒山からくき抜き神社へ下った時も漢方薬の匂いがする地域があった。昔からの地場の製薬工場がいくつもあつたのである。

生駒山から和歌山まで連なる山々にはいくつもの峠がある。昔は大阪湾が広がりが住めるようなところではなく奈良に都を造つたのだろう。その為、奈良と大阪を結ぶ交通路として峠を行き来したのだ。いにしへのロマンを感じる。

山上から見る大阪のビル群を太古の帆船に見立てれば、さらに想像が広がる。タイムスリップして当時に住んでみたい気分になった。

線引き

何才から高齢者と呼ぶかの議論がとんでいたのに、昔より十才は若返っているからという。

「七十五才説」が出たのだが、ある集まりに行くときさまさま。趣味にしろ実益にしろ打ち込めるものがある人は若々しい。七十五才の人が口から泡を飛ばして「夢を持ち続けている間は青春だ」という元気に一同しゅん。

だが見つめるのは自分の足元、年令からくる体力の衰えは経験や知恵で補えるというけれど、さて？と考える。私の苦手は切符を買うこと、どんな切符でも当日必要といわれても三日前から落ち着かない。

今は便利になって、「自動販売機があるじゃない」と無造作に人はいう。失敗が苦しませる。

お札をのせるところがあつて、そこへお札をのせたにもかかわらず、奥へ吸い込まれずに押し戻されてくる。取つて改めてのせる、押し戻される、取つてのせる、戻される、またのせる。

後を振り返って他人さんと思つたら「駅員さんと呼び出しなさいよ」という。又それがわからない。駅員はどこにいるのよ。

「そのボタンを押せば」といわれてボタンを押したら、不細工な顔が「なんですか」

「シワがあつたらダメです…」

「え、なに」

「シワを伸ばして入れてください」自分の顔に思わず手が伸びた、ムリな事いっても困る。又次の人に目を向けたら

「顔のシワじゃないですよ、札のシワですよ」と。この老人、は早くせんかないな、はた迷惑な。

仕方なく札を取つて眺める。シワはないが一方の角が少しめくれていたのだ。顔をなげた手で再び札のシワをのばしたのだ。サーッと入つていった。自動販売機、大嫌い。自分で限界の線引きをしたら、その瞬間から「老い」が身にしてみる。

長生き

ピンポンと響く音に見慣れている顔でも意外な時間だと変に胸騒ぎがする。

「結果報告書ですけど、姑が一〇二才で安らかな顔で旅立ちました。初七日も終えて、私達の務めもやつと」

私も二の句が出ず。

「長い間大変でしたね。お疲れ様」常日頃自分に言い聞かせているのだが、「人はある程度生きたら死んでいくもの」老々介護であったのだろう。夫婦で一人は車いす、痛々しい姿。

長い看護でいろいろなことを経

験し、この夫婦に幸あれと。わからないことがあれば、教えてくれる存在、ああ今日も生きていて、よかつたと思えるような。

くしゃんくしゃん、へつくしゃん。おかげで長いあいだ風もひかないよ、と思つてたら、オヤオヤ、元気なバアさんに風邪が訪問しとるようじゃな！

柚子

たくさん黄色の実をつけている空き家。種々の樹木に囲まれて、その間を縫うようにして柚子が鈴なりに、誰か取つて食べてくれないかと話しかけているような表情。

愛犬をつれて必ず歩く散歩道。空を見上げて柚子を一つ二つ三つ、数えきれない。

桃栗三年、柿八年。柚子のバカヤロー十八年。あーもつたいない…。一個拾つてでも帰つて柚子茶を、よそさんのじゃねえ！

実は種を取つて細くきざんで砂糖をまぶしてしばらく置く、おいしい柚子茶を飲んでみたい！

実のなる木を植えたけれど「庭に実のなる木を植えるのはよくない」といわれる。「どうして」と聞いても、それはわからない。他家から頂くイチジク、柚子、金柑で幸せを楽しませてもらっている。ありがたいと思う。

俳句

土田 裕

柚の道歩めば匂う竹の秋
夕暮れに余花とも見ゆる薄明り
酒脱かな名医作家の夏衣
こぼれ来る木漏れ日もまた緑なる
残されし植田にビルの影並ぶ

影山武司

甲羅干すつがひの亀の鳴く日かな
のどけしや単線駅の待ち時間
飛石を跳んで近道春落葉
京都琵琶湖疏水
花の雲雲また雲の古都の丘
駆け回り落花追う子はつむじ風
格子戸の向かふの闇や花朧
京都鹿ヶ谷靈鑑寺
尼寺の外で迎ふるリラの花
花屑の追ひかけてくる散歩道
草色の陽炎まとひ野を行きぬ
やはらかに風を知りたる柳かな
父母と猫と吾が孫夏逃す
つくばひに雲通りすぎ夏逃す